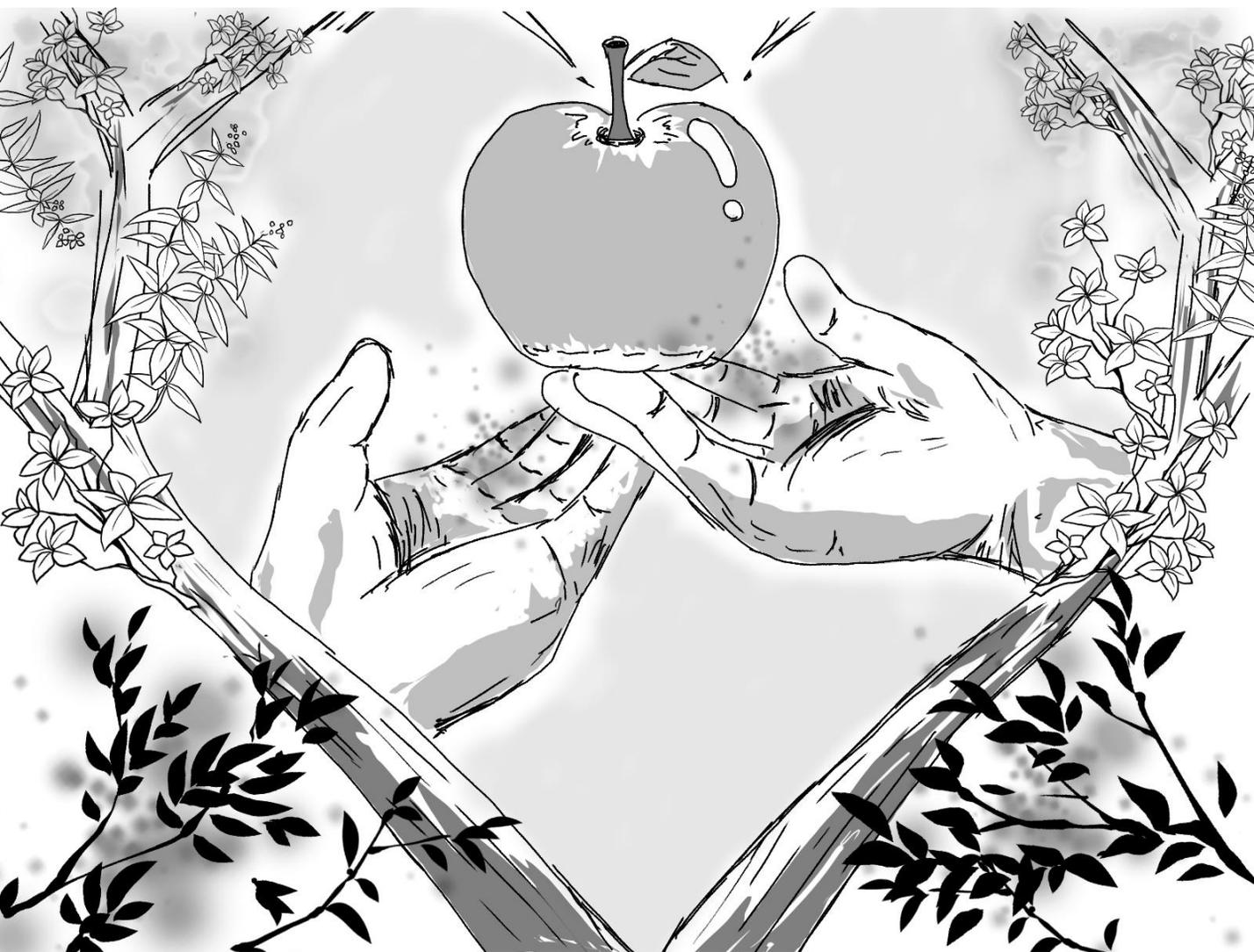


第15回大会 せたがや福社区民学会

学びあい 広げよう せたがや福祉の輪
「“生きる”を支え 未来につなぐ」

報告集



日時 令和5年11月11日（土）

12時～17時30分（開場11時30分）

会場 東京農業大学 世田谷キャンパス 1号館2階（講義棟）

目 次

◆	せたがや福社區民学会第15回大会プログラム.....	2
◆	東京農業大学 キャンパスマップ.....	3
◆	全体会Ⅰ.....	5
	開会.....	6
	せたがや福社區民学会会長挨拶.....	7
	世田谷区長挨拶.....	8
	せたがや福社區民学会第15回大会開催校挨拶.....	9
	基調講演.....	10
◆	実践研究発表.....	21
	ポスター発表一覧.....	22
	口頭発表一覧.....	23
	ポスター発表	28
	口頭発表 第1分科会.....	44
	第2分科会.....	54
	第3分科会.....	64
	第4分科会.....	74
	第5分科会.....	84
	第6分科会.....	94
	第7分科会.....	104
◆	ワークショップ.....	113
◆	全体会Ⅱ.....	123
	大会総括.....	124
◆	第15回大会実績.....	132
◆	大会プラス.....	133
◆	「第15回大会・介護の日」特別企画.....	135
◆	学会名簿.....	139
◆	協賛企業等広告.....	145
◆	資料.....	155

せたがや福社区民学会 第15回大会プログラム

1 全体会Ⅰ (12:00~13:00) 1号館2階 231教室

- 開会挨拶 諏訪 徹 せたがや福社区民学会会長
- 区長挨拶 保坂 展人 世田谷区長
- 開催校挨拶 江口 文陽 東京農業大学学長
- 基調講演 「障害者支援施設こころみ学園とそのワイン醸造場
ココ・ファーム・ワイナリーの歩み ~あったもがんばん~」
越知 眞智子 社会福祉法人こころみる会 統括管理者

2 分科会 (13:00~16:25)

- ポスター発表 (13:00~16:25) 1号館2階
- 【コアタイム】 (15:10~15:55) 222・223・224教室
- ※発表者が説明および質疑に対応します。
- ※ポスター会場は13:00から16:25まで自由にご覧いただけます。

- 口頭発表 (13:30~16:25) 1号館2階 各教室
- 第1分科会 211教室 第5分科会 233教室
- 第2分科会 212教室 第6分科会 244教室
- 第3分科会 213教室 第7分科会 243教室
- 第4分科会 232教室

- ワークショップ (14:00~15:00) 1号館2階 241教室

3 大会プラス (11:30~16:40) 1号館2階

4 「第15回大会・介護の日」特別企画 (13:00~16:25) 1号館2階 242教室

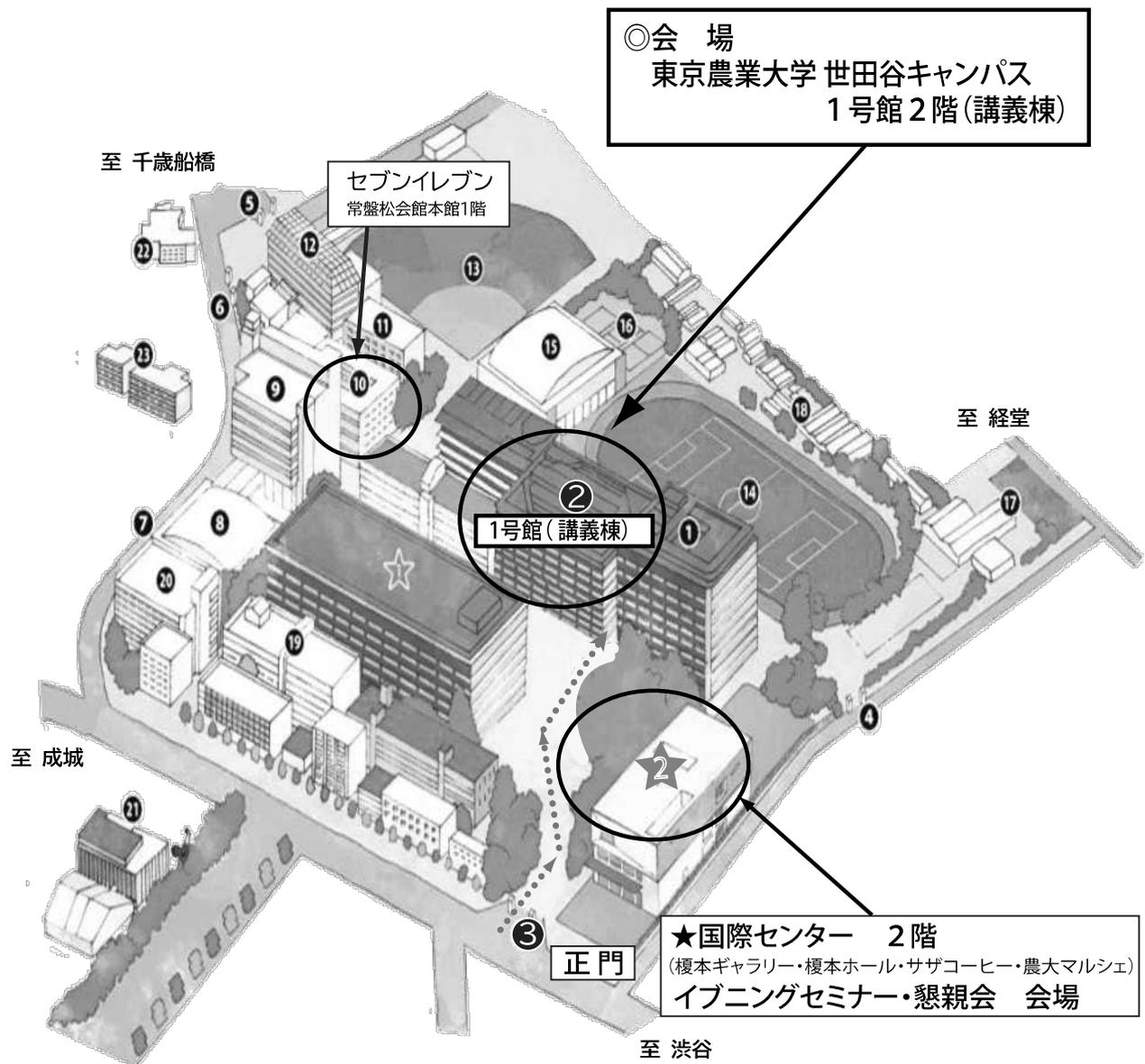
5 全体会Ⅱ (16:45~17:30) 1号館2階 231教室

- 大会総括
- 次回開催校挨拶 佐伯 徹郎 日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
- 閉会

※全体会では、手話記録・パソコン文字通訳を行います。
※分科会で手話通訳をご希望の方は総合受付にお申し出ください。

※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学の学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

東京農業大学 キャンパスマップ



★ 農大サイエンスポート
(研究棟・学部事務室)

★ 国際センター

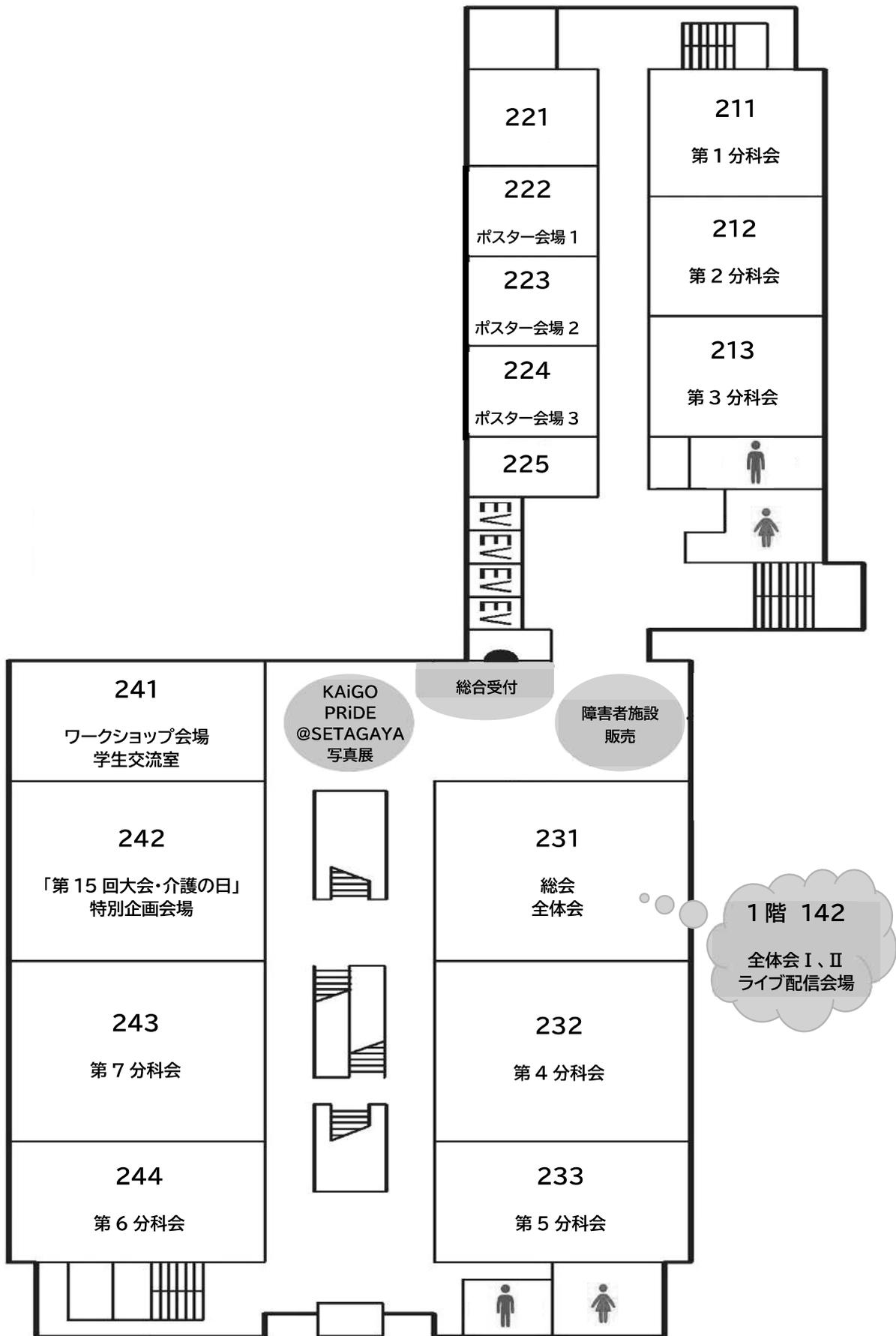
(榎本ギャラリー・榎本ホール、
サザコーヒー・農大マルシェ)

- ① 農大アカデミアセンター
(図書館、学校法人本部、大学事務)
入学センター1階
- ② 1号館(講義棟)
- ③ 正門
- ④ 経堂門
- ⑤ 千歳門
- ⑥ 桜丘門
- ⑦ 用賀門

- ⑧ 100周年記念講堂
カフェテリアグリーン
- ⑨ 18号館(レストラン「すずしろ」)
- ⑩ 常盤松会館本館
(農友会部室、生協、セブンイレブン)
- ⑪ 常盤松学生会館(同好会室)
- ⑫ 常盤松会館道場
- ⑬ 野球場
- ⑭ グラウンド
- ⑮ 桜丘アリーナ
(体育館、トレーニングジム)
- ⑯ テニスコート
- ⑰ ホッケー場

- ⑱ 温室
- ⑲ 11号館(健康サポートセンター)
- ⑳ 12号館(食品加工技術センター)
- ㉑ 「食と農」の博物館・バイオリウム
- ㉒ グリーンアカデミー・ホール
- ㉓ 桜丘寮・若草寮

1号館2階（講義棟）フロア図



全体会 I



開 会

進行 東京農業大学 杉原 たまえ

皆さま、こんにちは。

ただいまから、「せたがや福社区民学会第15回大会」を開催いたします。本日はお忙しいなか、ご参集いただき、ありがとうございます。私は東京農業大学国際農業開発学科の杉原 たまえと申します。

第15回大会 実行委員長、全体会Ⅰの司会を務めさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。



開会に先立ち、この会場におきまして「令和5年度 せたがや福社区民学会総会」が開催されましたことを報告いたします。

さて、本日は、お手元の大会要旨の4ページ「大会プログラム」に沿って、進めさせていただきます。それでは、早速、全体会Ⅰを始めさせていただきます。なお、本学会では、記録及び当会の広報のため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、差し障りのある場合は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけておりますスタッフまでお申し出ください。

はじめに、せたがや福社区民学会会長 諏訪 徹から、ひと言ご挨拶申し上げます。本日は、大学公務のためビデオメッセージでご挨拶させていただきます。



せたがや福社区民学会会長 挨拶

日本大学文理学部 諏訪 徹

ご来場の皆さま、今日は、せたがや福社区民学会の第15回大会にご参加いただき、まことにありがとうございます。私は前任の長谷川会長のあとを受け、本年度より学会長を拝命いたしました、日本大学の諏訪です。本来、この場で直接ご挨拶さしあげなければならないのですが、今日は大学の用務で、どうしても抜けることができないため、録画でご挨拶を申し上げます。



私がこの学会に出会ったのは、日本大学に赴任した2013年、ちょうど10年前のことです。通常、学会というものは研究者だけが参加するものですが、この学会はボランティア活動をしている地域の住民の方が発表したかと思えば、次は事業者の方々が発表し、次は学生が発表する。まず、この不思議な空間にびっくりしました。そして、それがとても居心地がよく、いつまで、この学会のファンになりました。私は福祉の中でも地域福祉という領域を専門としていますが、この地域福祉はみんなで一緒に作る、ごちゃ混ぜの福祉というのを理想としています。この学会は、それにぴったりなんです。せたがや福社区民学会という名前にあるように、この学会は世田谷に住み、働き、学ぶ人たちが世田谷の福祉をより良くしていくために集い、共に学び、お互いを高めていこうという、全国ほかにはない、とてもユニークな学会です。

さて、第15回大会は、東京農業大学を会場に行われます。この学会が設立された当初は、世田谷区と区内の福祉系大学、つまり社会福祉士という福祉関係の資格を取れる大学が協力して設立をしました。しかし近年は、福祉系大学以外にも会員校が広がりつつあります。東京農業大学は、福祉関係の資格が取れるという意味の福祉系大学ではありませんが、農学を基盤に食、健康、命、暮らし、地域づくりを大切にしていらっしゃると理解をしています。これらはまさしく本日の大会テーマにある「生きるを支える」もので、みんなの幸せな暮らしという意味の福祉とつながるものです。もともと福祉と農業、食には昔からつながりがありました。

食事サービスのボランティア活動は、命と暮らし、健康を守るもので、ここ世田谷でも先駆的な活動が行われてきました。また、近年では、子ども食堂やフードパントリーなども広がっています。さらに、障害福祉分野と農業との関わりは昔から深いものがあります。農作業や食品の製造・販売は障害者の作業所の重要な活動の1つでした。それが今日、農福連携と呼ばれています。本日の基調報告では、やはり農福連携の先駆者である「ココ・ファーム・ワイナリーの歩み」をお話しいたします。このように、世田谷の福祉をつくる仲間の大学が農業の分野にも広がり、本日、大会が開かれることを心からうれしく思います。

東京農業大学の皆さまには、ご準備まで大変ご苦勞をいただいたと思います。本当にありがとうございます。また、会員校からの多くの学生ボランティアの皆さん、事務局の世田谷区社会福祉事業団の皆さま、運営をサポートしてくださっている世田谷区の職員の皆さま、ありがとうございます。

本日はどうぞ、よろしく願いいたします。最後に、今日1日がここにお集まりの皆さまの学びと新たな出会い、交流の機会となる素晴らしい1日となることを祈念し、大会のご挨拶とさせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

世田谷区長 挨拶

世田谷区長 保坂 展人

皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂 展人です。

せたがや福社区民学会が、15回目の大会、ここ東京農業大学で開催されますこと、誠におめでとうございます。

この区民学会は、会長の挨拶にもあったとおり、ユニークな学会で平成21年から、「学びあい 広げよう せたがや福祉の輪」をテーマに、区内の昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学、東京農業大学、日本女子体育大学の8大学に参加いただいています。



つい一昨日、世田谷区長と学長の懇談会を、東京農業大学を会場に開催しました。区内には17の大学と学部がありますので、過半数の大学がこの学会に参加をいただいています。この15回にわたり、この学会の運営をしながら参加をいただき、また支えていただいた皆さんに感謝申し上げます。

本日の基調講演では、2000年沖縄サミットの晩餐会の乾杯ワインに饗されて、清らかなおいしきで感動を与えて世界に知れわたることになった、障害者支援施設こころみ学園のココ・ファーム・ワイナリーについてのお話を伺うと聞いております。

また61の事例発表、学生理事の実行委員会で進められるワークショップ、また15回大会・介護の日特別企画と、多くの企画が同時並行で行われるということです。

せたがや福社区民学会で出会い、また新たなネットワークが広がっていくことを期待したいと思います。また、会長の挨拶にもあったように、農福連携についても、世田谷区でもここ数年で、だいぶ広がってきています。区としての取り組みも、だんだんと本格化しており、この農福連携を通して、畑を通して、いろいろな福祉団体のみならず、様々な人たちが出会い、交流する効果は素晴らしいと思います。

こうした福祉あるいは市民活動、住民活動の中で、場所がないという問題が、なかなか頭が痛い問題ですが、空き家活用がいよいよ世田谷区も、空き家の数だけは日本で一番多いそうですが、なかなか手のつけようのない形で老朽化する前に、空いてそれほど時間が経たないうちに改装するなどして、地域の福祉目的や交流目的で使っていくような事業や、市民活動がかなり広がっております。そういったものをさらにプラットフォームを広げ、またつながりやすくするのも、区の役割だと思います。

15回目の福社区民学会の開催、誠におめでとうございます。実り多い日となるよう期待して、ご挨拶といたします。

開催校 挨拶

東京農業大学学長 江口 文陽

皆さん、こんにちは。東京農業大学・学長の江口 文陽でございます。せたがや福祉区民学会がこの東京農業大学の世田谷キャンパスで開催されること、心からお祝い申し上げます。

本来であるならば、会場に伺い、ご挨拶申し上げるべきところでございますが、公務と重なってしまったため、ビデオレターという形にさせていただきました。おわび申し上げます。



現在、福祉という領域において、このコロナ禍というのは大きな問題がございました。それは、人と人とが接することができない。そういったような問題です。福祉を円滑に、そしてしっかりと進めていくためには、やはり人のぬくもりであったり、人が心と心、そして言葉と言葉を交わすということが大切ではないかと思えます。

そういった中で、子どもの福祉、高齢者福祉、そして多様な福祉といったような部分。この学会におけるいろいろな議論が、この福祉といったような部分を市民とどう向き合っていくのかというところで、大きな意味があると、私は考えております。

本日、この世田谷キャンパスで行われる学会が、いろいろな福祉業界にとって何らかの視点を広めていくということにつながることを願い、この大会に対しての、私からのお祝いメッセージとさせていただきます。

本日は、本当に会場に伺えず申し訳ございませんが、皆さまのご理解のもと、そしていろいろな交流を深め、そして更なる連携強化ということにつなげていただければと思います。

本日は、本当におめでとうございませう。



基調講演



障害者支援施設こころみ学園とそのワイン醸造場
ココ・ファーム・ワイナリーの歩み
～あったもがんばん～

社会福祉法人こころみる会統括管理者
ココ・ファーム・ワイナリー農場長
越知 眞智子

皆さん、こんにちは。

栃木の田舎から今朝出てきまして、ここに来るまで住宅地を歩いてきましたが、やっぱり世田谷って素敵な所だなと思いました。今日はこころみ学園と、そのワイン醸造所ココ・ファーム・ワイナリーがどんなところなのか皆さんに紹介できればと思います。

これは、葡萄畑の一番てっぺんから見たところです。左側の方にこころみ学園の寮があり、右側がワイン醸造場、ワインを造っている場所です。

こころみ学園はどんなところかと言いますと、こころみる会という社会福祉法人の運営している入所型の施設です。現在の制度では入所施設は、昼の部分と夜の部分に分けられて、夜の部の定員は90名。一方昼の部は生活介護という事業を行っており、130人がこちらを利用しています。その他にも夜の部として共同生活援助、グループホームが

6つあり、定員は26名です。法人全体では、知的障害の方がメインですが、知的に高い方々は、準職員として、障害者雇用をさせていただいています。その方たちも含めると全部で136名の人たちが、昼間こころみ学園で活動されています。最年長は女性で、「88歳のおばあさん」と言うと怒られますが、お二人いらして、それぞれグループホームと入所施設で暮らしています。

一番若い方は18歳の男性で、中学校を出てすぐにこころみ学園に来ました。10代は彼だけで、20代も比較的少ないです。10代、20代は、入所の空きを待っている短期入所とは言うものの、長期で短期入所を利用している方や、まだ、ご両親が健在なので自宅から通ってくる人たちが占められています。年代別の割合は、10代(0.7%)、20代(9.6%)、30代(15.4%)、40代(14%)、50代(13.2%)、60代(18.4%)で、70代の方が25%とかなり多くいらっしゃいます。さらに80代が5人(3.7%)。

私どもは農作業を中心に活動していますが、その作業の中心を担うのは、30年以上こころみ学園の施設で暮らしている50代後半以上の方たちなのです。障害支援区分については、区分なしの方が5名いますがその方たちは準職員です。それ以外は区分4が14名、区分5が32名、半分以上の84名の方が区分6で、非常に重たい方々です。

利用者の方たちは、昼間6班に分かれて活動しています。1つは原木椎茸を運ぶ作業をしています。青いTシャツの彼はかなりこだわりが強く、要求が通らなるとお母さんに頭突きをくらわせ、お母さんはその度鼻を骨折。「大変で、どうかならないか」とご両親に連れられておいでになったのですが、彼は来たときには全く斜面に登れませんでした。これではやることがないと思ってお断りしたのですが、お母さんが彼に怯えてしまっていて、あまりに気の毒でお受けしました。そんな彼が10年ぐらいたち、



今はさっそうと斜面を登れるようになっていきます。斜面を椎茸の原木を持って移動する作業の効果だと思えます。

2つ目のグループは草刈り部隊で、機械や小鎌で葡萄畑の草を刈ってくれています。それ以外にも近所の家の草刈りも頼まれてやっています。**3つ目は葡萄班**です。6月から7月にかけては、葡萄の房ひとつずつに傘をかけます。葡萄の収穫もします。傘を外して収穫し、収穫するときは傷んだ粒を外して収穫します。

こうした外の作業が苦手な方は、室内でクラフト製品を作ります。チーズのカッターボードや古くなった樽をバラバラにしたものにやすりをかけたり、牛乳パックで和紙を作りレターセットを作ったりしています。こうした製品はワインショップに置かせていただきます。また入所施設には約100人が暮らしているので、その人たちの**洗濯物を請け負う班**の人がいます。大きな業務用の洗濯機で洗ったものを、外に干し、乾いた洗濯物を畳む作業をしています。**歳をとってこうした作業ができなくなってしまった方**たちは、特殊浴槽のお風呂に入ったり、電気のマッサージに当たったり、おやつを食べたりしてのんびり過ごします。部屋にずっと籠りつきにならないように、とにかく昼間の活動として、部屋を出てどこかに移動することを大事にしています。看取りができるようにと作ったグループホームもあり、4つの部屋のうち1部屋だけは離れた場所にあって、亡くなる前までいろいろな方が時間を気にせずに会いに来られるようにしています。

こころみ学園は私の父、川田 昇が創ったのですが、父は学校の教員をしていました。戦争が終わって、優秀な人は戦死されてしまい、あまり頭のよくなかった父でも教員の番が回ってきます。その父が中学校に赴任したとき、いつも教室の後ろでボーッとしていて、授業が始まると机に突っ伏して寝ている子どもたちに会いました。その子たちを見たときに、自分の小さいころに似ているなと思ったそうです。

父は農家の生まれで、稲刈りなどで忙しいときは、家中の働ける者はみんな手伝うのですが、まだ小さかった父は弟と一緒にカゴに入れられてあぜ道ですっと待っていたんですね。そのとき、お母さんが田んぼの真ん中で腰が痛そうにしていたのを見て、父は自分も手伝えばお母ちゃんが少し楽になるかなと思い、カゴから這い出して行って、稲の束を運んでみたんです。そしたら、お母さんがすごく喜んで、夜晩酌をしていたおじいさんに、「のぼが稲の束を運んでくれたんです」と報告したそうです。そしたらおじいさんが「そりゃあ猫よりましだ。ほれ、これでも飲めや」と晩酌のお酒をお猪口に注いで、昇さんにくれたんだそうです。それを飲んだらあまりに美味しくて、こんなおいしいものが飲めるなら、明日からも手伝おうと思ったそうです。

そんなことをしていたら**小学校に上がる前にどうもうまく知恵が発達しなかった**ようです。ある時お母さんが、「のぼ、学校に行くなら10まで数えられなきゃなんないんだぞ」と言うのです。昇さんは1、2まではいくのですが、そのあと3が出なくて5になったり8が来てしまったりと、1から10まで数えられなかったんです。その日からお風呂で真っ赤になるまで特訓です。ようやく数えられるようになりましたが、ある時お母さんが慌ててやってきて、「のぼ、大変だぞ、学校に行くには自分の名前が漢字で書けなきゃだめなんだぞ」。父は三本川の川田。川は何とか書けますが、田は1本足りなかったり多くなったりしてしまい、うまく田が書けないんです。そこでお母さんが考えて、「のぼ、川って書いてみろ」。川は書けました。「じゃあ次は、紙を横にして川って書いてみろ」そうしたら何とか田という字が書けました。「良かったな、これで学校に行けるな。だけどな、のぼ、学校に行くなら晩酌やめろ」と言われるくらいお酒が好きだったようです。

あるとき授業で先生が「皆さん、いくつまで数えられるか、大きな声で数えましょう」と言ったのです。昇さんはお風呂で特訓したので、得意になって「1、2、3…10、できたっ！」とやったんです。でもほかのお子さんは、11、12、13、・・・と数えます。それを聞いて昇さんは頭にきて、「やめろっ、やめろおっ！ 小学1年生は10まで数えられればいいんだっ！」と大暴れしてしまったんです。どうもその時から先生に目をつけられてしまったようです。

ある時、授業参観がありました。「お母ちゃんは来てくれるかな？忙しいからだめかな？」とドキドキしながらそおっと後ろを見ると、ちゃんとお母さんが来てくれていました。授業が始まると先生がみんなのところを回りながら、「このお嬢さんはとっても絵が上手なんですよ」「このお坊ちゃんは、歌がとっても上手なんです」と、一人ずつみんなのことを褒めてくれました。昇さんは「先生はなんて俺のことを褒めてくれるかな。元気のいいお坊ちゃんって言ってくれるかな」と期待して待っていました。いよいよ自分の番が回ってきました。するとそれまで、満面の笑みでみんなのところを回っていた先生が、急に鬼のような顔になり、「このお子さんだけが、このクラスのがんです」。昇さんは自分が誉められなかったことだけは分かりました。忙しい中、せっかく来てくれたお母さんは・・・と、そおっと後ろを振り向くと、お母さんは申し訳なさそうに先生に頭を下げていました。それを見て、昇さん、家に帰ったら大目玉だと思いました。なので夕方になっても帰れなくて、ずっと家の門のところでうろうろしていました。でも、だんだん暗くなり心細くなり、おなかは減るし・・・。いよいよ意を決して家に入りました。玄関を開けると、閉まった障子の向こうから「のぼかい？」とお母さんの声がしました。やっぱり、俺にゲンコツくれるためにお母ちゃんは待ってたんだ。そう思って黙っていましたが、「のぼ、叱らないからこっちへおいで」とお母さんは声をかけてくれました。そうは言っても叱られんだろうな。昇さんは思いましたが、ゲンコツ覚悟でふすまを開けました。案の定、お母さんは正座をして待っていました。そして「のぼ、いいからこっちおいで」。そう言うと、のぼをぐっと引き寄せて、ギュッと のぼを抱きしめ、「のぼ、大丈夫だ。百姓は仕事ができれば、まんまが食える」、そう言ってくれたのです。

昇さんはその言葉がずっと頭の中にあり、中学校の教員になって自分と同じように勉強ができずにぼっとしている子どもたちを見たとき、「この子たちは頭で食っていけないなら、一懸命体を動かして、体で食っていく人間にしないで」と思いました。その時から今の山に土地を買い、開墾を始めました。そのときの写真です。中学生だった子どもたちと一緒に、自転車でここへやってきて、機械が入らないので、全部手作業でした。のこぎりで生えていた雑木を倒し、枝をはらい、根っこを掘り起こし、掘り起こした穴にはらった枝を入れて、石だらけでガチガチだった山の土をトラクターがわりに耕作し、2年がかりで開墾しました。



それまでも、知的障害の子には果物がいいと思っていました。果物なら1年に1回、実がなってそれを食べられる。それを食べられればこの子たちにも自分がやったことの意味が分かる。そう思って学校の庭でいろいろな果物を作っていました。その中でも葡萄ならワインになる。そう思い開墾した山に葡萄の木を植えることにしました。

葡萄を植えて3年くらい経ちようやく葡萄がなり始めました。休憩するための小屋も、病院を建て直

すときの廃材をもらってきて、小屋を建てて、日差しをしのぎました。しかしそのうち、「あの教員は文部省のカリキュラムに従わないで、勝手なことをやってけしからん。でもクビにはできないので、**管理職にしてしまおう**」と、**教頭を命じられました**。父は3日間教頭をやりますが、どうしてもつまらなくて辞表を出して教員を辞めました。ちょうど葡萄も採れるようになったし、その頃、就職できない子もいるので、そういう子たちを集めて、葡萄屋でもやるかと。

学校の教員を辞めてしばらくすると、千葉県で県立の障害者施設を建てることになり、その立ち上げの協力を頼まれました。それが**千葉の県立袖ヶ浦福祉センター**でした。施設の周りは酪農をやっている農家が多く、そこへ施設の子どもたちが就職しますが、しばらくするとみんな帰されてしまうのです。どうしてなのかと農家の方に聞いたら、「あの子たちは、仕事はできるけど、隙間風が入るとか、トイレにハエがいて臭くて嫌だとか文句ばかり言っている」。そう農家のご主人に言われてしまいました。考えてみれば昭和41年当時、普通の家に水洗トイレはないし、サッシの入った家もめったにありませんでした。でも**県立の施設は、サッシの扉ですきま風は入らない、トイレも水洗トイレという立派な建物**でした。その時昇さんは思いました。この子たちが育つときには、**ほどほどに貧しいことが大事だ**。そう思って袖ヶ浦福祉センターを辞め、足利に戻りほどほどに貧しい施設、**こころみ学園**を作りました。

昭和44年に社会福祉法人の認可がおりて、30名から入所施設を始めました。そこで大事にしたことのひとつは、「**生活の場を自分たちで作る**」ということでした。朝起きたら掃除をして、朝食や夕飯後は食堂を掃除する。当時は、ご飯も自分たちで作っていたので、お勝手にも入っていました。私も学校を出てすぐ入職し、それまでまともに食事など作ったこともなかったのですが、たったひとりで150人分の献立を考え食事を用意しなければなりませんでした。それは本当に大変でしたが、お勝手に専属の園生たちがいてくれたので、彼女たちに手伝ってもらって何とか3食を作ることができました。この写真の彼女は、残ったご飯を炒めてチャーハンを作ることもやってくれていました。でもこの人たちもだんだんと歳をとって炊事場で働くことができなくなり、一時期はパートさんに入っていたかきながらなんとか自分たちで食事を作っていたのですが、それも難しくなっていって、今は委託業務となっていってしまいました。でも、いつかもう一度お昼ご飯くらいは自分たちの手で作りたと思っています。

洗濯も自分たちでやっていた。当時はこのように洗濯物をみんなで寮の屋上に干していました。でも高齢になって屋上に干すのはとても大変になったので、業務用の洗濯機のある場所から、バリアフリーで干せるような干し場を造りました。冬場は衣類が多いので、部屋の中にも干したりします。これは乾いたものをたたんでいるところですが、洗濯作業も細分化することで、いろんな人が洗濯作業に関わることができています。さらに歳をとってしまい自力で歩くことが難しくなってしまった人たちは、介護用のミストが出るお風呂に入った後、ラジオ体操などをして過ごしていましたが、最初のころはケンカばかりしていたのです。そんな時、車いすになってしまった以前チャーハンを作っていた彼女の部屋へ、夜、私が行くことがあったのですが、彼女がぼそっと、「あたしゃあ（私は）なんでこんなになっちゃったんだい？」と言うのです。それを聞いて私は唖然としてしまいました。そうか。歳をとって体がいうことをきかなくなり、以前のように炊事場で活躍することもできず、トイレに行くことさえも自分一人でできなくなってしまった自分が情けなく、悔しかったのか。何と言ってあげたらよいかすぐには思いつきませんでした。かろうじて言えたのは、「そうね。歳をとったのよ。でもあなたは昔、私を一生懸命手伝ってくれたでしょう。だからもう今はゆっくり休んでいいんじゃない」ということだけでした。



歳をとってもできること

しないでずっと頑張って、コツコツやってくれています。

もうひとつ父は「やっても、やっても終わらない量の仕事が大事だ」とよく言っていました。

農家の仕事は1年に一度しか同じことをしないので、量が少ないとなかなか覚えられない、この人たちは体で覚えないとできないのだから、**やっても、やっても終わらない仕事の量があれば覚えていける。**これは原木椎茸です。とんでもない量の椎茸原木をかつては作っていました。今は2万本ぐらいですが、このときは15万本ぐらい。冬に伐採した木に椎茸の種ゴマ菌を打ち込むのですが、山中にあるので大変でした。また椎茸が出てきたときは採るのが大変です。きれいに組んでおくには場所が足りず、山積みになっているところから椎茸が出てきます。

このおばあちゃんは97歳まで頑張ってくれました。天然の椎茸が出てくると、すごい量になります。昼間は外の椎茸を採って、ハウスの中は投光器をつけて夜に採っています。冷蔵庫に入りきれないので、乾燥機にかけます。乾燥椎茸にするには、ふつう36時間くらいかかりますが、それでは入らなかった椎茸は腐ってしまいますので、表の水分だけを飛ばし、2時間くらいでどんどん入れ替えていました。

これが葡萄の箱です。当時は2キロの箱詰めにして生食用として販売していました。このおじいさんも93歳まで長生きしました。剪定した葡萄の枝は、ダウン症の彼女も63歳まで長生きしましたが、彼女がこうやって働いてくれていました。

やってもやっても終わらない量の仕事(椎茸採り)



急な斜面が人を創る



それと、**急な斜面が人を創る**ということも、父はよく話していました。椎茸の原木を伐採しています。こんな斜面の山の木を切り落とすのですが、どんな傾斜か分かります？足を踏ん張りやっとな立っている状態で、倒した木に尺棒を当てて印を付けます。これを原木のサイズに切っていきます。切った原木をみんなで運び出します。どんなに知恵が低くても、斜面が上り下りできれば作業に参加できます。というか、この人たちがいないと

作業が進みません。時間つぶしのためではなくて、本気でやってもらわないといけません。山の斜面は、ひとつも同じところがありません。根っこや石、岩が出ているので、相当に神経を集中させていないと、上り下りができません。今まで家で暴れたような人でも、斜面を登り下りするためには、神経を集中して登り下りします。伐採に行くと町が見えたりして、とても気持ちのいいところだと思います。この写真は、今この仕事はなくなりましたが、すり鉢のようになった斜面に、点々と白いものがあります。これは草刈りをしているところです。何となく黒くもわっとしたのは、スギやヒノキの幼木です。植林も自分たちがしていました。若い状態のところの下草が生えると木が枯れるので、鎌でずっと刈っていくわけです。みんなで列になって刈り上げる。そんな作業もこの人たちがしていました。

作ることができますが、売るのが大変です。ワイナリーができる前までは生食用で葡萄を売っていました。お盆の前後1万箱を2週間で売らなければならなくて、大変な思いをしていました。以前は世田谷にも生食用の葡萄を配達に来たこともありましたが、これをワインに加工できればと**醸造免許を取ろう**となりました。当時、社会福祉法人こころみる会として醸造免許を取ろうとしましたが、「**社会福祉法人**というのは税金で運営するところであって、そこが**酒税という形で税金を納める**というのは前例がないので、**免許はおろせない**」と言われていました。何とか方法はないものだろうかと思っていたら、たまたま、父は運が良く、お預かりしていたお子さんの親御さんの1人が国税庁のOBで、「じゃあ、会社を作ったら」と提案いただいて、こころみ学園とは別組織で**有限会社**を作ることになりました。それが**有限会社ココ・ファーム・ワイナリー**の始まりです。



1980年2月、措置の対象から外れた人たちの保護者が中心となって、「有限会社樺崎産業」を作り、果実酒の醸造免許を申請しました。こころみ学園の敷地ではなくて離れたところに樺崎町という場所があり、そこに会社を作ろうと思ったのですが、近所の人に反対され、仕方なく今の敷地の中に会社をおくことにしました。実はそれが功を奏したというか、良かったのは、この敷地の中に醸造場があることで、園生も寮から歩いて行けることでした。1984年に仮免許で12,000本の醸造許可があり、2年後に本免許

があり、有限会社ココ・ファーム・ワイナリーと改名しました。有限会社は賛同してくれ出資してくれた保護者の方が株主になりました。

こころみ学園とココ・ファーム・ワイナリーは、助けること、助けられることという関係で成り立っています。まず、ココ・ファーム・ワイナリーは**葡萄栽培の技術を教え**、それに対して、こころみ学園は**できた葡萄を全部ワイナリーに納品してワインにしてもらいます**。それに対して、ココ・ファーム・ワイナリーは、葡萄の代金を払ってくれます。こころみ学園で作った**椎茸やクラフト製品をショップに納品**すると、それに対しても代金を払ってくれます。また葡萄をつぶす仕込み作業の際に、機械に葡萄を入れたり、瓶詰めの際も人手がいるので、こころみ学園の園生は、**労働力としてワイン工場働きます**。こうした労働力の提供に対しては、ココ・ファーム・ワイナリーは**工賃として働いた園生の人数×働いた時間で払ってくれます**。

この工賃は、年に1度、みんなに配分します。2年前から就労継続支援B型事業を廃止して、全部、生活介護事業とし、1年分をその年に得た金額によって、皆さんに分ける形に変えました。

2003年から、社会福祉法人も自分たちでお金を稼ぎなさいとなって、収益事業をやるようになったので、そのときに、それまでころみ学園の敷地内にあった醸造場を、社会福祉法人ころみる会が有限会社ココ・ファーム・ワイナリーに貸す形で、家賃を頂く形での収入も得ています。

ワイン作りが始まったとき、父は思いました。

「お情けで買ってもらうものではダメだ」。障害者の人が作ったから買おうでは1本で終わってしまう。本物を造らなきゃ。そのためにワイン造りの技術は、本場の知識を持った人を呼ぼうと、知り合いの方がカリフォルニアでブルースさんを探してくれました。父とブルースさんは偶然、誕生日が同じでした。ブルースさんが自分の手を見ながら父に言っています。彼はアメリカ人だったので、日本にきたときに、外国人登録、英語でエイリアン・レジストレーションと言うらしく、エイリアンってすごいなって思ったのですが。指紋を押すのです。彼の場合、ワインを造っていると葡萄の糖分で指紋が溶けて無くなっていたのです。でも、そのほうが珍しいかと、無事通してもらえました。

実は彼が来るきっかけになったのは、カリフォルニアのデイヴィス校でブルースさんの同級生と巡り会ったことが最初です。ブルースさんを紹介してくれた同級生のマットさんとその兄さんのフレッドさん兄弟と知り合ったのがきっかけです。兄弟はロダイでワイン作りをしていますが、カリフォルニアでもワイン造りが盛んになるところで、彼らはソノマでワイナリーを始めようとしたところでした。クライン兄弟が、日本に来ることになり、私たちのところへ来て驚いてこう言います。「アメリカの障害者はみんなぶくぶく太って働けない。だけど日本の障害者は働けるんだ！！」と驚きます。そう言って帰り、その後、彼らがソノマに移るときにお呼びがかかりました。「自分たちのワイナリーの立ち上げを手伝ってほしい」とオファがかかるのです。代表選手として何人かの園生が選ばれて、ソノマへ行きました。それがこの写真です。その頃、ブルースさんはカリフォルニアでワインのコンサルタントをしていて、マットが紹介してくれました。

昇さんとブルースさんは偶然誕生日が同じ日



カリフォルニアにて(ブルースさんも加わって)



この人は父が亡くなる1週間前に亡くなりました。その手はまさしく農夫の手で、彼は本当に働き者でした。葡萄を採ってきて山にして積んだままフォークリフトで運ぶと、ぐちゃぐちゃになってしまう。だから無骨なこの手で、山になった葡萄をそっと丁寧にならして平らにしているんです。誰かに教わった訳ではなく、自分が作ったものを大事に育てることを、ちゃんと最初から分かっているのです。

知的障害のある人は勉強はできなくても、仕事をやる能力は別だと、私は思います。その能力を見つければ、本当にいい仕事をしてくれます。

これは赤ワインを造っているところで、浮かび上がってきた葡萄の皮を沈める仕事です。この人は、メキシコから季節労働者で働きに来た人です。彼はスペイン語、クラインセラーの人たちは英語。なのに遜色なく会話ができます。彼だけじゃなくて、みんな、カリフォルニアに行ったときには、何語で指示が来てもちゃっちゃと仕事ができます。職員は英語やスペイン語が聞こえると頭が真っ白になってしまいますが、彼らは関係なく仕事をします。職員が父に「どうしてあの人たちはスペイン語や英語が分かるのですか？」と聞いたそうです。そうしたら父が一言。「彼らは日本語も分からねえんだよ」って。要は言葉で仕事をするのではなく、体で覚えて、今は何が必要かを見極められるってことなんです。父も言っていました、杭を打つなどの仕事はお手のものです。彼らは言葉が通じなくても、ちゃんと仕事ができるのです。

これも驚いたのですが、ご飯を作るのに女子職員がついて行ってくれました。空いた時間にトランプで「神経衰弱」をしているところです。私は知的障害のある人ができると思っていなかったのが、驚きました。この人はさっきの彼ですが、タバコが大好き。施設に入所する前は、タバコ1箱で大八車を引くみたいなことをしていたようです。そんな彼はアメリカでは葉巻を吸っていました。

カーテン方式



ではせっかくなので、園生の実力発揮について。

日本の葡萄づくりは、棚の上を木が覆っている形が一般的です。うちの葡萄畑は急斜面なので、山が崩れないよう、下には草を生やしています。ブルースは、**ワインの味は90%葡萄で決まる**と言い、**いい葡萄を作らないといけない**。なのにこのままでは、美味しいワインができないと言い、オーストラリアから葡萄栽培のコンサルタントを呼びました。

真ん中の人オーストラリアから来たスマートさんという葡萄栽培のコンサルタントです。スマートさんが来て最初に言われました。「この仕立て方では、よい葡萄ができるはずがない。棚の上に葡萄の枝が広がって、葉っぱが上を覆っている。その下に葡萄の房が下がっている。でもその房は、下から草が生えていてそこから湿気が上がってくる。上は葉が覆っていて湿気が逃げず、下からは湿気が上がってくる。その中に葡萄が腐っている。これで葡萄が腐らない訳はない。枝を下に全部おろせばいい、そうすれば、葡萄はここに来て、お日様が一番当たるでしょ」。そう目からうろこのアドバイスをもらいました。おまけに一直線に枝を配置することで、葡萄の房も一列に整然と並ぶことになります。こんな感じで一直線になっています。知的障害のある人は、一列に葡萄が並んでいるので、とても分かりやすく、傘をかけるときも分かりやすくなります。

園生の実力発揮:草刈り



ただ、日当たりがよくなると草もよく生えます。葡萄畑の下から草を刈り始め、一番上まで草を刈り終わると、下からまた草が生えてきます。そのため仕事に事欠くことがないです。

彼は本当に働き者です。午後5時に仕事が終わっても、まだ明るいからと1人で葡萄園の上に行って、小鎌で草を刈ってくれました。それ以外にもこの人たちならではの仕事が、たくさんあります。カラス番の彼は、トマトケチャップの缶を叩くだけでカラ

園生の実力発揮



粗皮はぎ

カラス番



スを追い払うという得意技があります。ぜひワイナリーに遊びに来ていただき、本物を見てください。これは急斜面で傘をかけています。

これは葡萄を木にならせたまま、傷んだ粒を取っていく作業です。葡萄は、熟してくると糖度が上がり、酸が落ちてきます。酸は抗菌作用があるのでそれが弱まるということは、傷んだ粒が出てくるということです。その傷んだ粒だけを収穫前に1粒1粒とる作業です。そうしてしっかり熟した葡萄を収穫してワインにするのが、美味しいワインを作る秘訣だと思います。いよいよ収穫となりますが、コンテナ

を置いてある角度が斜面の角度ですから、いかに急な斜面で作業しているかお判りいただけると思います。

これが仕込みのとき。みんなで葡萄を潰していますが、この作業に対して1人いくらかと工賃が払われます。

これは赤ワインを造る際に行われる葡萄の皮を沈めるパンチダウンの作業です。これは発酵中のワインです。プチプチしているのは、酵母が糖分を食べてアルコールに変えていく過程で出る二酸化炭素です。

その二酸化炭素を瓶に閉じ込めたのがシャンパンです。その後、樽等で熟成し、ブレンドを決め瓶詰めをしていきます。ワイン醸造の免許は場所に降りるのですが、ここで免許を取りました。あまりきれいではないですが、誰かがフォークリフトをぶつけて、潰れてしまったようです。ところが、そこが火事になりました。日本財団にお金をいただいて、このように、葡萄畑を見ながらワインを飲める場所にしました。日本の文化のお酒は、食事はあくまでサイドだけれど、ワインは食事と一緒に飲んでこそ、実力が発揮できる。ずっとやりたかったのは、お食事をしながらワインを飲める場所を作りたいということでした。

葡萄がなりたいワインをつくる。

葡萄の仕込み



園生の実力発揮:さらに丁寧に痛んだ粒取り



葡萄畑を見ながらワインと食事を楽しむ



葡萄畑を見ながらワインと食事を楽しむ



これは1週間後に開催されることになっている収穫祭です。このようにして、みんなが集まってきてくれます。

ワインのお祭り収穫祭



ワインのお祭り収穫祭



最後に、ワインgrowerからのメッセージです。
私たちがどんな気持ちでワインを作っているのか
ということです。私たちはワインメーカーという言
い方をしていません。ワインはメイキングではなく
て、グローイングだと思うからです。
葡萄を育て ワインを育てる。そんな感覚です。

ワインgrowerからのメッセージ

葡萄がなりたいワインになれるように、その持
ち味を生かせるように、見守りながら発酵させて
います。

野生酵母は気まぐれで不器用だから、発酵中
に何が起こるかわかりませんが、樽を覗けば、
たくさんの種類の野生酵母が次ぎから次へと交
代で力を発揮し、助け合いながら懸命にワイン
をつくっている姿が見て取れます。

その姿は園生とそっくり。それがココファーム
のワインづくりです。



あったもがんばん。

ココ・ファーム・ワイナリーのワインは、この人たちがいないとできないし、この人たちの力を発揮し
ながら造ったワインです。

本日の懇親会にも、いくつかお持ちしました。ココ・ファームが何をやっていたのか、ワインを飲んで
いただければお分かりになると思います。時間のある方はテイastingしてみてください。

ご清聴、ありがとうございました。

暗くなったあと、葡萄畑のてっぺんから、見た
写真です。足利の夜景が見られます。関東平野の
はじっこにあるのが、よく分かります。

収穫の時期には真っ暗になるまで、仕事をします。
仕事が終わって暗くなって、疲れ果てているのに、
彼らは、「先生、あったもがんばん」と言いながら
楽しそうにそう声をかけてくれます。

～明日も頑張る～ そう言いながら、暗くなっ
坂道を駆けてきます。

ワインは2000年沖縄サミット公式晩餐会に饗されました。



実践研究発表



ポスター発表一覧

第1会場			【222教室】
【コアタイム 1～4】15:10～15:35			
助言者 山戸 茂子 (世田谷区高齢福祉部長) 板谷 雅光 (世田谷区社会福祉事業団理事長)			
	発表者	所属	タイトル
1	川口 有美子 寺尾 弘子	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	ヤングケアラーの支援 —家族みんなが楽しく暮らせるように—
2	根本 一弥 中島 和子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	奥沢の集い —ここが私の居場所と言ってもらえるように—
3	栃倉 勝	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所	奉優会奥沢居宅介護支援事業所の活動報告 —ケアマネジャーのリアルな活動お知らせします—
4	石井 貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	外へ出ましょう。集まれ地域の集い —地域での新しい取り組み—

第2会場			【223教室】
【コアタイム 1、2】15:40～15:55			
助言者 山戸 茂子 (世田谷区高齢福祉部長) 板谷 雅光 (世田谷区社会福祉事業団理事長)			
【コアタイム 3、4】15:10～15:25			
助言者 田中 耕太 (世田谷区保健福祉政策部長) 長岡 光春 (世田谷区社会福祉協議会常務理事)			
	発表者	所属	タイトル
1	篠崎 広一	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	GO! GO! 実態把握
2	石川 里子	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	オレンジカフェ代沢を集いの場にするために —いきいき暮らせる地域を目指して—
3	熊谷 勇太	株式会社HABING	福祉の選択肢と可能性を拡げる —日本初の取り組み—
4	プリマ・クリスナワティ 植手 淳子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	海を越えて 外国人職員のキャリアアップ

第3会場			【224教室】
【コアタイム 1～4】15:30～15:55			
助言者 田中 耕太 (世田谷区保健福祉政策部長) 長岡 光春 (世田谷区社会福祉協議会常務理事)			
	発表者	所属	タイトル
1	水上 朽美 石黒 眞貴子	世田谷区福祉移動支援センター 「そとでる」	「移動」は生きること —支える一人ひとりが自ら気づく研修会を目指して—
2	畠中 映里 根本 陸 山根 圭以子 ヴィナウイラマハウイア ンチ	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	医療と介護: 早期発見・早期治療から見えてきたこと
3	芳村 裕子 後藤 浩子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス	ホームヘルパー「にこりホッとエピソード」 —プラスの感情・笑顔がもたらす効果—
4	野末 由紀子 結柴 夏海	NPO法人わんぱくクラブ育成会・ 幼児グループわんぱく	自閉症スペクトラム幼児A君に対することば・コミュニケーション支援について —情動的交流遊びの役割—

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。
ポスター会場は、13時00分～16時25分まで自由にご覧いただけます。

口頭発表一覧

第1分科会

【211教室】

1 子ども・若者が輝くまち 世田谷

5 福祉の魅力発信

進行役・助言者

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)
樋口 美津子 (子どもの生活研究所こぐま学園長)

	発表者	所属	タイトル	開始
1	山田 明日香 藤本 悠那 田中 小愛 明地 夏希 石代 ゆい 土屋 菜々子 小峰 夏蓮 桑島 彩	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	世田谷区における子育て支援の実践と学び ーソーシャルワークプロジェクト活動を通してー	13:30
2	鰐川 祐騎 臼井 眞心 寺師 里南 佐藤 真睦	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室	新BOPの役割と今後の課題	13:55
3	塩野 高志	社会福祉法人福音寮 まいぷれいす@はなもも	生活困窮世帯等の子どもの成長と家庭の生活の安定に 向けた学習・生活支援の拠点事業 (愛称:まいぷれいす@はなもも)を世田谷区から受託運営 した中での気づき ー「したい」を「できる」にしてみない?ー	14:20
4	松崎 和美 小堀 勇士 眞鍋 博美	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園	自己主張と他者の受容	14:50
5	中田 美音 野村 遥花 森原 優希 山崎 美空	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室	若者の自己肯定感について	15:15
6	土井 蓮	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷	足漕ぎ車いすへの挑戦 ーそれぞれのニーズに応えるためにー	15:40
7	土田 直哉 渡邊 優香里 富樫 麻子 メッシナ アリンドラ ブトゥリ	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	服薬事故防止におけるロボット活用 ー服薬ロボ活用事例ー	16:05

第2分科会

【212教室】

2 地域をつなぐネットワーク

進行役・助言者

川上 富雄 (駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授)
山本 学 (世田谷区社会福祉協議会連携推進課長)

	発表者	所属	タイトル	開始
1	真下 美弥子 辻 清哉	社会福祉法人聖教主福祉会 砧愛の園	小規模多機能型介護施設の地域交流 ー縁と笑顔をゆるやかにつむぐテラスー	13:30
2	長見 亮太	社会福祉法人せたがや榎の木会 地域障害者相談支援センター ぽーときぬた	障害のある方への生活支援員から相談支援員になって 思うこと・感じたこと	13:55
3	醍醐 正文 杉原 知久磨	社会福祉法人奉優会 優っくり村下馬	大規模災害時における事業継続計画と地域とのつながり (絆)	14:20
4	武田 一樹 石川 泰子 内山 かず江	太子堂まちづくりセンター 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター 社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会 太子堂地区事務局	三者連携によるスマホ講座の取り組み ースマホHELPチームー	14:50
5	秋友 史衣 金田 万寿子 大川 みどり 薄田 瑠衣 前田 佐知子 和田 淳	社会福祉法人敬心福祉会 烏山地域包括支援センター 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター	65歳からの ハロー★ボランティア・ハロー★ワーク ー地域とつながり、自分を役立てる仕組み作り実践報告ー	15:15
6	磯崎 寿之 片岡 沙織	世田谷区介護サービスネットワーク 田辺薬局三軒茶屋	介護事業者団体として地域活動のネットワーク作りと その実践 ー介護事業者にとどまらない多職種や区民との協働ー	15:40
7	佐藤 庸平 広本 正子 川名 三知代	砧地域ご近所フォーラム 2024実行委員会	砧地域ご近所フォーラム2023「KYPきぬた夢プロジェクト」 ー夢を語り合う…夢をかなえるには、どんな“まち”であれ ばいい?ー	16:05

第3分科会		【213教室】		
2 地域をつなぐネットワーク		3 多様性を認めあう共生社会づくり		
進行役・助言者		向笠 京子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授） 田嶋 真一（烏山総合支所保健福祉課長）		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	大西 晋平 小櫻 倭子 斎藤 翔太 関根 優大 高柳 聖 西尾 咲々 野末 洲 拜詞 吉平 藤田 優翔 松田 悠海 松本 歩	日本大学文理学部 社会福祉学科 2年	フィールドワークを通じて大学を超えた交流と福祉の つながり －「支援」ではない視点から向き合う－	13:30
2	佐藤 祐樹 小山 歩 星 有美 金子 修平 河野 由香 佐藤 恭子 小西 和子	池尻・三宿 にんにん会	『池尻・三宿 にんにん会』の活動 －人と人が認め合い、それぞれのチカラを活かして地域と 繋がっていきこう－	13:55
3	白石 哲也	リハレストアジオ世田谷 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	オンラインとオフラインを融合したフレイル予防の “新しいカタチ”で世田谷を変える シニア男性がいつまでも健康で輝き続けられる社会へ	14:20
4	吉川 麻美 神野 淳子	NPO法人せたがや子育てネット ぶんぶくテラマチ	明日が来るのが楽しみ！な居場所づくり －“まちの縁がわ”ぶんぶくテラマチの実践－	14:50
5	市村 和行 秋森 かつ枝 浅倉 信次 伊藤 潤一	世田谷区福祉移動支援センター おでかけサポーターズ	市民による玉川おでかけバスの運行報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を目指す市民 活動－	15:15
6	内山 実玖 太田 真珠彩 藤澤 日菜 横尾 雪乃	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	地域をつなぐ地元野菜	15:40
7	小倉 香奈 鈴木 杏莉 南川 日佳理 渡辺 万莉	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室	日本とオーストラリアの幼児教育におけるICT教育の普及 について	16:05

第4分科会		【232教室】		
3 多様性を認めあう共生社会づくり		4 ケアにおける協働・連携		
進行役・助言者		佐伯 徹郎（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授） 高橋 裕子（玉川総合支所健康づくり課長）		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	手塚 由美	一般社団法人 輝水会	スポーツを通じた障害のある人の地域における居場所 づくり	13:30
2	鬼島 勇太	社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホームフォーライフ桃郷	外国人職員と共に働く	13:55
3	板垣 貴宏 HTOO TIN ZAR KHAING	LPC学園グループ 一般社団法人日中人材育成協会 東京支部 介護事業部 社会福祉法人ノテ福祉会 グループホームノテ深沢	外国人介護人材の導入成果 －これからの介護現場に必要な人材－	14:20
4	関 勝之	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム鎌田	外国人介護福祉士が日本での就労継続に至った要因 －EPA介護福祉士5名の語りから－	14:50
5	景山 香代 上田 めぐみ 鬼塚 正徳 吉田 周平	けやき学級 世田谷区教育委員会事務局 生涯学習課	けやき学級の障害のあるメンバーと仲間たちの活動 －共に学ぶ自立と仲間づくり－	15:15
6	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや榎の木会 上町工房	福祉事業所における地域との繋がりを作り －上町マーチから－	15:40
7	平川 雄介	三軒茶屋リハビリテーションクリニック	ALS患者に対する訪問リハビリテーションの現状と課題 －君たちはどう生きるか－	16:05

第5分科会

【233教室】

4 ケアにおける協働・連携

進行役・助言者 大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永 宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	石野 郁花	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	モンテッソーリケアによる認知症の介護実践 －QOLの向上に向けて－	13:30
2	市宮 奈那江 吉田 雅子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	よりそう 今までも これからも －きづき つなぎ むすぶ－	13:55
3	信夫 武人 大西 統	NPO法人都民シルバーサポート センター	NPO法人との連携によるおひとりさま高齢者支援 －これからの地域包括ケアシステム構築の上で必要な こと－	14:20
4	吉野 清美	城南食支援研究会	「最期まで食べられることを楽しめるまちをつくろう」 －城南食支援研究会の活動－	14:50
5	信岡 裕紀 山田 貴之 米澤 大我	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホームフレンズホーム	クラスター収束後のいつもの生活を取り戻す過程について	15:15
6	石井 文代 大場 哲也 佐藤 歩	医療法人社団プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町	「自宅で暮らす」を継続するために看多機ができること －A様の場合－	15:40
7	島田 実桃 木嶋 由実 小関 綾乃 春田 霞月 箱山 菜莉 寺口 侑和 松原 映真 小野寺 莉子 小塚 光咲	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	世田谷区のA高齢者施設における活動の実践と学び －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－	16:05

第6分科会

【244教室】

6 一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者 森田 規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本 睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	北畑 美奈	東京リハビリテーションセンター世田谷 児童支援事業所ぶらみんぼーと 放課後等デイサービス	遊びを通した子どもとの関わり －プレイセラピーの実践－	13:30
2	永山 柚月	社会福祉法人たちばな福祉会 RISSHO KID'S きらり代沢	一人ひとりのつぶやきを大切にされた保育 －夢を叶えるためのヒト・モノ・コト－	13:55
3	大山 さなみ	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	個の育ちを支援する関わり方を考える －A君との関係性構築に向けて－	14:20
4	森江 智孝 金田 英也 岸井 丈	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所	安定した通所を目指して －本人を知る事、実習所を知ってもらう相互理解から 学んだこと－	14:50
5	渡辺 聡司	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	慣れない環境の中で睡眠がとりにくい利用者と関係を 深めて安心感をもって睡眠が取れるような関係性を つくることを目指して	15:15
6	千葉 美瑠 齋藤 フアトウ樹音慈縁 藤野 健太 川谷 真生	日本大学文理学部 社会福祉学科 4年	せたがやゼミナールの活動と課題	15:40
7	田島 和美	社会福祉法人せたがや榎の木会 まもりやま工房	「受容」に求められることを考える －新たな出会いから－	16:05

第7分科会

【243教室】

4 ケアにおける協働・連携

6 一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者

神田 裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
伊藤 美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	佐川 武 玉田 清朗 浅見 貴和 吉廣 祥子 黒野 大希	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	介護職員による高度に変形した爪へのフットケアの実践	13:30
2	島崎 亮輔	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園	アシストスーツの活用 ー腰痛予防と軽減を目指してー	13:55
3	小松 さやか 小菅 延子 小林 朝子	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	最期まで自分らしく ー第二の我が家は、どうあるべきかー	14:20
4	星 有美 原 仁美	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻 社会福祉法人こうれいきょう 池尻介護保険サービス	可能性と生きがいづくりをデイサービスで！ ーデイホーム池尻の個別対応ー	14:50
5	竹内 洋子 渡辺 三恵子 和仁 智子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	最期まで口から食べるための専門職グループ研究会 「もぐもぐチーム」の取り組み	15:15
6	宮本 真理子	社会福祉法人奉優会 優つくりデイサービス喜多見	寄り添う ーご本人、そしてご家族様の思いを受け止める最後の受け皿としてー	15:40
7	藤本 祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	皮膚反応に着目して、体の動きを変える	16:05



ポスター発表

助言者

山戸 茂子 (世田谷区高齢福祉部長)

板谷 雅光 (世田谷区社会福祉事業団理事長)

	発表者	所属	タイトル
1	川口 有美子 寺尾 弘子	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	ヤングケアラーの支援 —家族みんなが楽しく暮らせるように—
2	根本 一弥 中島 和子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	奥沢の集い —ここが私の居場所と言ってもらえるように—
3	栃倉 勝	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所	奉優会奥沢居宅介護支援事業所の活動報告 —ケアマネジャーのリアルな活動お知らせします—
4	石井 貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	外へ出ましょう。集まれ地域の集い —地域での新しい取り組み—
5	篠崎 広一	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	GO! GO! 実態把握
6	石川 里子	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	オレンジカフェ代沢を集いの場にするために —いきいき暮らせる地域を目指して—

進行役・助言者



山戸 茂子
(世田谷区高齢福祉部長)



板谷 雅光
(世田谷区社会福祉事業団理事長)

GO! GO!実態把握

社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター

篠崎 広一

(地域連携 フレイル 実態把握のシステム化)

目的

コロナウィルスの流行により社会の状況も変わり、度重なる緊急事態宣言により地域サロンや通いの場が活動休止となり、世田谷区の事業も休止や活動縮小を余儀なくされた。地域との交流も途絶えてしまい、住民と顔を合わせる機会や実態把握訪問も激減。このことで地域の実情がどうなっているのか見通しが持てない状況へと一変した。

そこで地域住民が置かれている状況を把握しようと実態把握訪問を見直すことにし、PDCA サイクルのプランにおけるプロセスから「地域または個人の現状を把握し、背景や要因の分析を行い、課題の解決につなげる目的で行うもの」と定義し従来の課題を検討した。

発表を終えて

渡部 梢 (社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター)

世田谷区内で毎年行っている高齢者実態把握訪問。コロナウィルス流行で様々な活動が中止となり、地域交流に制限が生じたことで地域の実情が不透明となった。これを機に実態把握の必要性や方法を振り返り、訪問方法を見直した。これまでの方法では、個別での情報保存のため分析のしづらさ等の課題が残ることに気が付いた。対象者を匿名化しデータ化することで個別だけでなく地区課題の分析に役立てることに成功した。

この発表後、他事業所の職員さんから温かいお言葉とデータ化の方法についてご質問をいただき、実態把握後の評価についても、まだまだ共通の課題があると実感した。

今後も課題解決に向け、分析と工夫を重ねる必要がある。



助言者コメント

山戸 茂子 (世田谷区高齢福祉部長)

板谷 雅光 (世田谷区社会福祉事業団理事長)

地域に住む高齢者のみ世帯や高齢者単身世帯の実態把握は、高齢者のみならず地域における課題を把握する重要な仕事である。実際に実態把握をおこなう地域包括支援センターでは、データの整理や訪問の段取り、訪問時の説明や質問内容の精査など過大な負担がかかっている。

今回の発表では、こうした実態把握をPDCA サイクルから考え再構築して行っている実証報告であり、かつ、対象者の年齢を前期高齢者まで広げ未然防止まで考えており、他の地域包括支援センターにこの手法が広がることを期待するものであった。

また、当日は予定していた発表者が来られず、急遽代理発表となったものの、しっかり内容は伝わりました。お疲れ様でした。

ポスター発表

助言者

田中 耕太 (世田谷区保健福祉政策部長)

長岡 光春 (世田谷区社会福祉協議会常務理事)

	発表者	所属	タイトル
1	熊谷 勇太	株式会社 HABING	福祉の選択肢と可能性を広げる ー日本初の取り組みー
2	ブリマ・クリス ナワティ 植手 淳子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	海を越えて 外国人職員のキャリアアップ
3	水上 朽美 石黒 眞貴子	世田谷区福祉移動支援センター 「そとでる」	「移動」は生きること ー支える一人ひとりが自ら気づく研修会を目指してー
4	畠中 映里 根本 陸 山根 圭以子 ヴィナウイラマ ハウイアンチ	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	医療と介護：早期発見・早期治療から見えてきたこと
5	芳村 裕子 後藤 浩子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス	ホームヘルパー「にこりホッとエピソード」 ープラスの感情・笑顔がもたらす効果ー
6	野末 由紀子 結柴 夏海	NPO 法人わんぱくクラブ育成会・ 幼児グループわんぱく	自閉症スペクトラム幼児 A 君に対することば・ コミュニケーション支援について ー情動的交流遊びの役割ー

※「NPO 法人わんぱくクラブ育成会・幼児グループわんぱく」は発表中止となりました。

進行役・助言者



田中 耕太
(世田谷区保健福祉政策部長)



長岡 光春
(世田谷区社会福祉協議会常務理事)



口頭発表 第1分科会

【211教室】

進行役・助言者

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)

樋口 美津子 (子どもの生活研究所こぐま学園長)

	発表者	所属	タイトル
1	山田 明日香 藤本 悠那 田中 小愛 明地 夏希 石代 ゆい 土屋 菜々子 小峰 夏蓮 桑島 彩	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	世田谷区における子育て支援の実践と学び ーソーシャルワークプロジェクト活動を通してー
2	鱈川 祐騎 臼井 眞心 寺師 里南 佐藤 真睦	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室	新BOPの役割と今後の課題
3	塩野 高志	社会福祉法人福音寮 まいふれいす@はなもも	生活困窮世帯等の子どもの成長と家庭の生活の 安定に向けた学習・生活支援の拠点事業 (愛称:まいふれいす@はなもも)を世田谷区 から受託運営した中での気づき ー「したい」を「できる」にしてみない?ー
4	松崎 和美 小堀 勇士 眞鍋 博美	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園	自己主張と他者の受容
5	中田 美音 野村 遥花 森原 優希 山崎 美空	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室	若者の自己肯定感について
6	土井 蓮	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷	足漕ぎ車いすへの挑戦 ーそれぞれのニーズに応えるためにー
7	土田 直哉 渡邊 優香里 富樫 麻子 メッシナ アリ ンダ プトゥリ	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	服薬事故防止におけるロボット活用 ー服薬ロボ活用事例ー

進行役・助言者



園田 巖

(東京都市大学人間科学部児童学科准教授)



樋口 美津子

(子どもの生活研究所こぐま学園長)

生活困窮世帯等の子どもの成長と家庭の生活の安定に向けた学習・生活支援の拠点事業

(愛称：まいぷれいす@はなもも) を世田谷区から受託運営した中での気づき

- 「したい」を「できる」にしてみない? -

社会福祉法人福音寮 まいぷれいす@はなもも

塩野 高志

(子どもの貧困 子ども権利 子ども参加)

目的

本事業は、世田谷区が子どもの貧困対策計画にもとづき、令和3年8月より、新たにスタートしました。関連機関と連携し、地域の見守りの中で、子どもや家庭が生活を安定することができるようになることを目指した事業です。夜間一人で過ごしている、家庭で学習できる環境がない……。そんな状況にある中学生が、夜間や休日を安心して過ごすことができる居場所で、ありのままの自分を受け止めてもらえます。そして、一人ひとりに寄り添ったサポートで、できることやチャレンジしたいことが増えていく。その達成に向けてサポートしています。



発表を終えて

塩野 高志 (社会福祉法人福音寮 まいぷれいす@はなもも)

発表後私たちの活動を評価していただき、「子どもとのコミュニケーションで職員が悩むことは何か」との質問をいただきました。日々の活動を通して、子ども同士の会話の中で「死ぬ」「死ぬ」と言う言葉が時々聞かれます。この言葉は決して容認できるものではないのですが、語彙力の乏しい子どもたちにとって自分の気持ちを表現する一つの言葉になっている場合もあります。その場で別の言葉で表現するように働きかけますが、それによって子どもが表現しようとする意欲や力を奪わないように気を付けています。

せたがや福祉区民学会で発表というアウトプットする機会を与えられたことで改めて自分たちの活動を振り返ることができました。



助言者コメント

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)

樋口 美津子 (子どもの生活研究所こぐま学園長)

今回の発表事例は、生活困窮家庭への支援における子どもの権利擁護への取り組みでしたが、その中でも「意見表明権」や「参加権」に焦点を当てたことは、とても有意義な視点であったと思います。これらの権利は、子どもの権利条約でも重要な要素として位置づけられており、その意味では価値ある実践と言えるのではないのでしょうか。また、“子ども中心”を理念に据え、献立会議への参画や献立選手権、誕生日リクエスト等の具体的な手法は、子どもの主体性を大切にされた取り組みであり、子どもの自己肯定感の獲得につながるものであると考えられます。こども家庭庁の理念である「誰一人取り残さず、抜け落ちることのない支援」の具現化としてもとても評価できると思います。

自己主張と他者の受容

社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園

松崎 和美、小堀 勇士、眞鍋 博美

(子ども 若者)

目的

私たち鎌田のびやか園4歳児グループは、良くも悪くも見通しが持てるようになる4歳児の葛藤に向き合い、日々、自問自答しながら保育にあたっている。

乳児期では、子どもたちの「やりたい」を保育者が叶えて具現化させ、3歳児グループでは子どもたちの「やりたい」を子どもと保育者が一緒に取り組み具現化させてきた。そのような経験を積み重ねた4歳児グループでは、子どもたちの「やりたい」を友だち同士で具現化させようと取り組んでいる。

上記のような子どもたちの主体的かつ継続性のある遊びが、4歳児の発達段階にある「自己主張と他者受容」に繋がっていくのではないかと考えた。子どもたち同士の育ち合う様子をお伝えすると共に、保育者として考えたこと、学んだことを報告する機会とさせていただく。

発表を終えて

松崎 和美 (社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園)

今回の発表を通して、日々の保育の中で、どのような思いや考えを持ち、子どもたちと関わっているのか、私自身が振り返る機会となりました。また、どのようにしたら自分の思いや保育実践が参加者の方々に伝わるかと考える事は大切であり、自分の言葉で伝えたという事が大きな学びとなりました。

参加者の方々から感想や質問を受け、自分の思いや日々の実践を受け止め、感じてもらう喜びを感じました。

子どもたちの揺れる気持ちや葛藤、そして、その子どもたちと関わる保育者間での振り返りを大切にしていきたいと改めて感じました。



助言者コメント

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)
樋口 美津子 (子どもの生活研究所こぐま学園長)

子どもの「やりたい」を保育活動のなかでどのように具現化するかについて、大変参考になる事例でした。発表で取り上げている「自己主張と他者受容」は、子どもの発達過程においてとても重要なテーマであり、そのことに関して継続的に取り組んでいるプロセスがよく理解できました。発表は4歳児クラスを中心としたものでしたが、乳児期からの発達保障が幼児期以降の育ちにも大きな影響を及ぼしていることが分かり、発達の連続性に関して再認識できる良い事例であったと思います。

子どもは葛藤体験から多くのことを学びますが、それには乳児期からの愛着形成や主体性を考慮した関わりが重要であり、本発表によってさらに子ども理解の深化が図られたのではないのでしょうか。

服薬事故防止におけるロボット活用

－服薬ロボ活用事例－

社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家

土田 直哉、渡邊 優香里、富樫 麻子、メッシナ アリンダ プトゥリ
(服薬 事故 防止)

目的

落葉・吐き出し・人間違い・処方ミス、これらに関する薬の事故が起きてしまっている。

これらは、ヒューマンエラーが原因。今回、服薬支援ロボットを導入することで、職員の負担軽減と、ご利用者様の安心・安全な生活を守ることを目的とした。

発表を終えて

富樫 麻子 (社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家)

貴重な発表の機会をいただきましてありがとうございます。私たち下馬の家は29床と、小規模の地域密着型特別養護老人ホームです。発表のとおり、薬剤師が施設内での健康管理に積極的に関わってもらえる環境となり、以前よりも健康管理面や職員の仕事の質の面でも上向いていると感じています。

今回、外部の方より貴重なご意見、ご質問をいただきました。

今後の活動への糧としていきたいと考えております。充実した時間をいただきましてありがとうございました。



助言者コメント

園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科准教授)

樋口 美津子 (子どもの生活研究所こぐま学園長)

服薬の際に発生するヒューマンエラーの背景や原因に関して丁寧に分析され、それを元に改善が図られた良い実践事例であると感じました。高齢福祉や障害福祉等の現場では、日常業務のなかで医療と福祉が混在していることがあり、多職種連携が必須となっています。また、援助者は、多忙な日常業務の中で複数のタスクを同時並行して取り組まなければならないこともあり、ヒューマンエラーの一因となっていることも否定できません。発表では、服薬ロボットを導入することにより複雑化した日常業務を整理できただけではなく、看護職の負担軽減にも寄与したことが示されました。

その結果としてロボット導入後のヒューマンエラーゼロという劇的な成果につながったことは、業務内に服薬を行っている他の事業所にとっても良い参考事例となったのではないのでしょうか。



口頭発表 第2分科会

【212教室】

進行役・助言者

川上 富雄 (駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授)

山本 学 (世田谷区社会福祉協議会連携推進課長)

	発表者	所属	タイトル
1	真下 美弥子 辻 清哉	社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園	小規模多機能型介護施設の地域交流 ー縁と笑顔をゆるやかにつむぐテラスー
2	長見 亮太	社会福祉法人せたがや檜の木会 地域障害者相談支援センター ぼーときぬた	障害のある方への生活支援員から相談支援員に なって思うこと・感じたこと
3	醍醐 正文 杉原 知久磨	社会福祉法人奉優会 優っくり村下馬	大規模災害時における事業継続計画と地域との つながり (絆)
4	武田 一樹 石川 泰子 内山 かず江	太子堂まちづくりセンター 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター 社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 太子堂地区事務局	三者連携によるスマホ講座の取り組み ースマホ HELP チームー
5	秋友 史衣 金田 万寿子 大川 みどり 薄田 瑠衣 前田 佐知子 和田 淳	社会福祉法人敬心福祉会 烏山地域包括支援センター 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター	65歳からの ハロー★ボランティア・ハロー★ ワーク ー地域とつながり、自分を役立てる仕組み作り 実践報告ー
6	磯崎 寿之 片岡 沙織	世田谷区介護サービス ネットワーク 田辺薬局三軒茶屋	介護事業者団体として地域活動のネットワーク 作りとその実践 ー介護事業者にとどまらない多職種や区民との 協働ー
7	佐藤 庸平 広本 正子 川名 三知代	砧地域ご近所フォーラム 2024 実行委員会	砧地域ご近所フォーラム 2023「KYPきぬた夢 プロジェクト」 ー夢を語り合う・・・夢をかなえるには、どんな “まち”であればいい？ー

進行役・助言者



川上 富雄

(駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授)



山本 学

(世田谷区社会福祉協議会連携推進課長)

小規模多機能型介護施設の地域交流

－縁と笑顔をゆるやかにつむぐテラス－

社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園

真下 美弥子、辻 清哉

(ことば 笑顔 縁)

目的

砧愛の園は開所2年目の地域密着型の介護施設で、屋内のホール部分とテラスから成る、地域交流スペース「きぬたんテラス」が設置されている。地域密着型施設では地域の方々と顔見知りの関係を築くことがひとつの課題となるが、昨年度は新型コロナで活動が制約された。そこで今年度は、この「きぬたんテラス」に各世代の方々に立ち寄りってもらうための複数の活動を企画した。これを通して施設が地域の暮らしをサポートし、地域から施設がサポートされる関係を構築していきたい。

発表を終えて

真下 美弥子 (社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園)

発表の際には大変有益なご助言をいただき、誠にありがとうございました。

砧愛の園はコロナ禍の昨年4月にオープンした施設で、当初から地域交流を通じた地域の活性化を念頭に、活動を続けてきました。子育て支援や学習支援をはじめとして、ボランティアの方々の協力を得て、毎週複数の事業を展開していますが、今回皆様からの有益なアドバイスをいただくことで、これを継続して行く確信を得ることができました。

当日、会場にいらっしゃった皆様にも本当にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



助言者コメント

川上 富雄 (駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授)

山本 学 (世田谷区社会福祉協議会連携推進課長)

子育て支援「子だぬき広場」の「開催頻度が高いがどのように運営しているのか？」という質問に対し、「きぬたまあそび村と協働して実施されていること、子育ての悩みを持つ親が多く、勉強・進路といった育児以外の相談対応をしている」とのご説明があった。

また、「茶飲み友達の時間」では「住民の悩みを聞く機会が多いとのことだが、連携している機関等はあるか？」との質問に対し「高齢一人暮らしの方には、地域の居場所に参加していただいたり、町内会等を紹介している」とのこと。

開所から短い期間で、地域と関わり、繋がりを構築し、非常に多くの地域公益活動を展開していることに頭が下がる思いである。

大規模災害時における事業継続計画と地域とのつながり（絆）

社会福祉法人奉優会 優つくり村下馬

醍醐 正文、杉原 知久磨

（自助 共助 公助）

目的

東京都においては、首都直下型地震や南海トラフ地震、台風による風水害等の危険が叫ばれており、高齢者施設でも、大規模災害時の対策や事業継続計画の策定が義務付けられています。実際に事業継続計画を策定し、シミュレーションを行った結果、自施設のみでは人員や物資、電源等が全く足りておらず、自分たちの施設や入居者を自分たちで守るという「自助」が機能していないことが分かりました。

発表を終えて

醍醐 正文（社会福祉法人奉優会 優つくり村下馬）

大規模災害時の事業継続計画や、地域での協力体制を模索しての発表でしたが、自施設の事業継続でも難しい状況という現実を突きつけられたようでした。

また、後半に取り上げた「大規模災害時地域協力ネットワーク」については、日本総合研究所と厚生労働省の「高齢者施設における非常災害時における地域ネットワーク構築の促進及び、訓練の実効性の確保に関する研究事業」から、ヒヤリング調査の依頼を受けることになりました。



これから実現に向けて進んでいきます。

助言者コメント

川上 富雄（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本 学（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

質問に対し、災害時、スマホなどの通常の通信手段が使えなくなることを考慮し、ヘルプマークに情報を入れておき家族との連絡手段への対策をしているとの説明があった。

2024年の4月以降、全ての介護・障害福祉サービス事業所のBCPの策定が完全義務化となる。BCPの未策定や避難訓練をしていないとペナルティになる。避難訓練を実施するにも様々な課題はあるが、訓練を通じて高齢者の避難体制を構築しておかないとなかなか実践できない。

地域との連携が大切で、日ごろから地域の方が協力してくれるような関係づくりが重要である。

砧地域ご近所フォーラム 2023 「KYP きぬた夢プロジェクト」
－夢を語り合う・・・夢をかなえるには、どんな“まち”であればいい？－

砧地域ご近所フォーラム 2024 実行委員会

佐藤 庸平、広本 正子、川名 三知代

(顔の見える関係づくり 夢 まち)

はじめに

砧地域ご近所フォーラムは、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指し、顔の見える関係づくりを進めることを目的に2010年に始まった。医療関係者、高齢・障害・子育ての支援者、大学、行政、その他砧地域で活動している多彩な人材で構成された実行委員会が、地域を支える各種団体や住民の協力を得て発信し続ける形は、当フォーラムならではの特色である。コロナ禍でオンライン開催としてきたが、2023年3月18日（土）4年ぶりに念願の対面開催となった。その内容を報告する。

発表を終えて

佐藤 庸平（砧地域ご近所フォーラム 2024 実行委員会）

この度、発表の機会を与えていただきありがとうございました。私たち「砧地域ご近所フォーラム実行委員会」は、人と人が「つながる」ことで、地域をよりよいものにしていく活動をしています。

今回、様々な方が私たちの話に耳を傾けてくれました。この出会いもその「つながり」の一つなのだと思います。

会場から「今回の企画に、当事者の方はどのくらい参加したのか？」とのご質問をいただきました。私たちは、その問いにすぐに答えることが出来ませんでした。私たちの活動は決して一方通行であってははいけません。垣根を超え、当事者も含むあらゆる方々とのつながりを大切にしているのだと、胸を張って答えられる活動にしていきたいと思っています。



助言者コメント

川上 富雄（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

山本 学（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

「認知症」のグループの中に、認知症の当事者の参加はあったのかという質問があり、「コロナ禍ということもあり、当事者の参加はなかった」との回答であったが、コロナ禍で顔の見える関係づくりが難しいなか、住民との繋がりを取り戻そうとする素晴らしい取り組みだと感じた。「認知症」「子ども」「看取り」のワークショップを通じて、当事者や関係機関の思いを聞き取り、人と人の関わりの重要性を報告いただいた。

取り組みから得た内容をいかに地域に伝えていくか、次回の報告も期待したい。



口頭発表 第3分科会

【213教室】

進行役・助言者

向笠 京子 (昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)

田嶋 真一 (烏山総合支所保健福祉課長)

	発表者	所属	タイトル
1	大西 晋平 小櫻 倭子 斎藤 翔太 関根 優大 高柳 聖 西尾 咲々 野末 洲 拜詞 吉平 藤田 優翔 松田 悠海 松本 歩	日本大学文理学部 社会福祉学科 2年	フィールドワークを通じて大学を超えた交流と 福祉のつながり －「支援」ではない視点から向き合う－
2	佐藤 祐樹 小山 歩 星 有美 金子 修平 河野 由香 佐藤 恭子 小西 和子	池尻・三宿 にんにん会	『池尻・三宿 にんにん会』の活動 一人と人が認め合い、それぞれのチカラを活かして 地域と繋がっていきましょう
3	白石 哲也	リハトレストアジオ世田谷 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	オンラインとオフラインを融合したフレイル 予防の“新しいカタチ”で世田谷を変える シニア男性がいつまでも健康で輝き続けられる 社会へ
4	吉川 麻美 神野 淳子	NPO 法人せたがや子育てネット ぶんぶくテラマチ	明日が来るのが楽しみ！な居場所づくり －“まちの縁がわ”ぶんぶくテラマチの実践－
5	市村 和行 秋森 かつ枝 浅倉 信次 伊藤 潤一	世田谷区福祉移動支援センター おでかけサポーターズ	市民による玉川おでかけバスの運行報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を目指す 市民活動－
6	内山 実玖 太田 真珠彩 藤澤 日菜 横尾 雪乃	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	地域をつなぐ地元野菜
7	小倉 香奈 鈴木 杏莉 南川 日佳理 渡辺 万莉	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室	日本とオーストラリアの幼児教育における ICT 教育の普及について

進行役・助言者



向笠 京子
(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)



田嶋 真一
(烏山総合支所保健福祉課長)

『池尻・三宿 にんにん会』の活動

一人と人が認め合い、それぞれのチカラを活かして地域と繋がってこうー

池尻・三宿 にんにん会

佐藤 祐樹、小山 歩、星 有美、金子 修平、河野 由香、佐藤 恭子、小西 和子
(認知症 障害 共生)

目的

コロナ禍で誰もが地域や社会とのつながりが希薄になる中、特に介護が必要な方々は厳重な感染対策に阻まれ孤立しがちになっていた。そんな中、何か地域と繋がれるような活動はできないか、との思いから会が発足。認知症や障害があってもなくても、年齢や性別、国籍などの属性を問わず、人を人として認め合い、それぞれのチカラを活かし、地域・社会と繋がっていけるような活動を広げていくことを目的とし、活動している。

発表を終えて

小西 和子 (池尻・三宿 にんにん会)

にんにん会立ち上げ後1年が経過し、活動主旨に賛同下さる方々が、地域に少しずつ増えて活動の範囲が広がってきている。今回の学会発表を機に、改めて活動の原点を再認識するとともに、当初から活動を共にしてきたメンバーや新たな縁で繋がったメンバーと、活動の振り返りと今後の方向性の共有ができた。各事業所や活動の場それぞれでやり方や力は違うけれども、実際に活動している様子や力を発揮している姿も目にすることができた。認知症や障害の有る無し、年齢や性別、国籍の違いも関係なく、地域に住まう様々な人と人が認め合う

「人、認」＝「にんにん」。

今後も少しずつ活動の周知を広め、幅広い活動を継続していければと感じた。



助言者コメント

向笠 京子 (昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)

田嶋 真一 (烏山総合支所保健福祉課長)

この活動は、世田谷区が目指す地域包括ケアシステムそのものであると感じました。認知症があってもなくても、障害があってもなくても、年齢等も関係なく、個人個人それぞれが個性をもち、お互いが理解、尊重し合える地域共生社会を目指すための活動を示していただきました。

活動の最も大切な部分。個々の力を発見し、その力を存分に活かしていただく。言葉で表せば簡単なものですが、実際は力を見つける事、その力を活かすための環境・条件等ノウハウを作り上げる事がいかに大変であるか。それを地域の方々がつながり協働して、つくりあげている事がとても素晴らしいと感じました。

この活動が拡がり、多くの方が幸せを感じられる地域共生社会ができる事を期待しております。

地域をつなぐ地元野菜

東京都市大学人間科学部児童学科 3年

内山 実玖、太田 真珠彩、藤澤 日菜、横尾 雪乃

(地域 地元野菜 つながり)

目的

本研究の目的は、野菜に焦点を当てて検討し、食育活動が地域のつながりに寄与する方法について考察することである。近年、保育施設や学校教育の現場で食育活動の積極的な推進が図られている。その一方で、地域社会の変貌により人と人とのつながりの希薄化が課題となっており、食育の視点から、地元野菜を活用した地域コミュニティの活性化に寄与できないかとの期待を抱くようになった。具体的には、食育と地域の活動とを関連させることで、地域のつながり作りに貢献できる方法について考察を深めた。

発表を終えて

藤澤 日菜 (東京都市大学人間科学部児童学科 3年)

質疑応答の際に、世田谷区は東京都 23 区の中で練馬区の次に畑が多いということや、世田谷目黒農業協同組合が設置されているということに関する助言をいただいた。よって、世田谷区は都市部である一方で、農業に関する取り組みが実施しやすい環境であるということも、改めて学ぶことができた。さらに、障害者福祉の視点から見ても、食育活動の有意義さを実感できることについても言及があったことから、より食育活動の対象を広げ、地域のような人にとって豊かな体験の場を提供することで、より地域資源を活用し、地域コミュニティの活性化に寄与できると考えた。

また、今ままでに食育活動の体験がある人に対して、どのような取り組みを实践してきたかという具体的な内容を調査することで、より実践を視野に入れた研究になるとの助言をいただいた。

そのため、今後は、調査の具体化と、研究の実践に励んでいきたい。



助言者コメント

向笠 京子 (昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)
田嶋 真一 (烏山総合支所保健福祉課長)

食育はとても大切であり、食育と地元野菜に注目した研究でした。今後の活動が楽しみです。

区内にまちづくりセンターがあり、様々な取り組みを行っているので、調べてみるとよいでしょう。まちづくりセンターと連携すると次につながっていくと思います。障害のある方と畑作業をしたり、食育を通していろいろな人たちと関わったり、ネットワークができると思うので、今後の活動に期待します。

日本とオーストラリアの幼児教育における ICT 教育の普及について

東京都市大学人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室

小倉 香奈、鈴木 杏莉、南川 日佳理、渡辺 万莉

(ICT 教育 幼児教育 異文化)

背景と目的

近年、世界では教育の ICT 化^{注1)}が急速に広まり、学校教育では、タブレットやインターネットを利用した新しい授業スタイルが展開されている。また、就学前教育施設（幼稚園・保育所・こども園）においても ICT を取り入れた保育が行われるようになってきている。

そこで本研究では、日本とオーストラリアの保育現場における ICT 教育の現状を明らかにすることを目的とする。2 か国の調査を行う理由は、世界のグローバル化が進む中、他国の現状を理解しておくことは重要であり、また、私達がオーストラリアの大学幼児教育の勉強をしたことから、両国の違いについて理解したいと思ったためである。

注1) ICTとは Information and Communication Technology の略で情報通信技術という意味

発表を終えて

小倉 香奈、鈴木 杏莉、南川 日佳理、渡辺 万莉
(東京都市大学人間科学部児童学科 3年 幼児教育学研究室)

まず初めに、このような貴重な発表の場を設けて頂きありがとうございました。

今回は、オーストラリアにおける ICT 教育について調査・研究する中で、私たちが現地で見えてきたことだけでなく、様々な背景を知ることが出来てとても勉強になりました。そして、オーストラリアと日本でお互いに活かしていける点を取り入れていくことが、大切だと感じました。

私たちは、初めてのせたがや福社區民学会での発表で、とても緊張しました。発表を聞いてくださった方々には、貴重なご意見、ご感想を頂き本当に感謝しています。ありがとうございました。



助言者コメント

向笠 京子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）
田嶋 真一（烏山総合支所保健福祉課長）

日本とオーストラリアの幼児教育における ICT の普及について、グローバルな視点から捉えた興味深い研究でした。

日本とオーストラリアの幼児教育について比較・検討しており、わかりやすかったです。

ICT 教育について利点と欠点を知る必要があります。保育現場においては ICT を工夫して活用していくことが重要です。日本の幼稚園で取り入れていない理由を具体的に質問すると、保育者の思いや意図がわかるのではないかと考えます。引き続き、研究を続けてください。



口頭発表 第4分科会

【232教室】

進行役・助言者

佐伯 徹郎 (日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授)

高橋 裕子 (玉川総合支所健康づくり課長)

	発表者	所属	タイトル
1	手塚 由美	一般社団法人 輝水会	スポーツを通じた障害のある人の地域における居場所づくり
2	鬼島 勇太	社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホーム フォーライフ桃郷	外国人職員と共に働く
3	板垣 貴宏 HTOO TIN ZAR KHAING	LPC 学園グループ 一般社団法人日中人材育成協会 東京支部 介護事業部 社会福祉法人ノテ福祉会 グループホームノテ深沢	外国人介護人材の導入成果 －これからの介護現場に必要な人材－
4	関 勝之	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	外国人介護福祉士が日本での就労継続に至った要因 －EPA 介護福祉士 5名の語りから－
5	景山 香代 上田 めぐみ 鬼塚 正徳 吉田 周平	けやき学級 世田谷区教育委員会事務局 生涯学習課	けやき学級の障害のあるメンバーと仲間たちの活動 －共に学ぶ自立と仲間づくり－
6	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房	福祉事業所における地域との繋がり作り －上町マーチから－
7	平川 雄介	三軒茶屋リハビリテーション クリニック	ALS 患者に対する訪問リハビリテーションの現状と課題 －君たちはどう生きるか－

進行役・助言者



佐伯 徹郎

(日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授)



高橋 裕子

(玉川総合支所健康づくり課長)

スポーツを通じた障害のある人の地域における居場所づくり

一般社団法人 輝水会

手塚 由美

(障害者 スポーツ 地域共生社会)

目的

ぼーとたまがわ（地域障害者相談支援センター）、玉川地域社会福祉協議会事務所と共催で、障害のある人の地域での居場所づくりの取り組みに対し、一般社団法人輝水会は、ポッチャを用いた障害のあることで分け隔てられることなく、誰もが参加できるスポーツプログラムの提供を行った。地域にいる専門職が力を合わせ得意な分野を担当することで、定期開催が可能となった、その内容を報告するとともに参加者や支援者からのアンケートより見えた成果や課題を考察する。

発表を終えて

手塚 由美（一般社団法人 輝水会）

2017年より毎年発表を行わせていただいています。昨年に引き続き対面での開催は、参加して下さる方の顔が見え、直接ご質問をいただくことができ、大変励みになりました。

地域における専門職との共催により月に1回の障害のある人のスポーツを通じた居場所づくりは、回を重ねることにより顔の見える関係が強固になり、お互いが声を掛け合う場面も見受けられるようになりました。

積み重ねることで見えてくる効果は、年に1回のスポーツイベントでは得られません。

今後も地域で専門職と共催しながら障害のある人が当たり前で地域で活動できる場づくりに努めていきたいと考えています。



助言者コメント

佐伯 徹郎（日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授）

高橋 裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

発表の中で動画を用いているのがとても効果的でした。何気ない工夫ですが参加者の様子がとてもよくわかりました。また、発表の中で共感できたのは、活動の中で参加者が世話をされるだけでなく、役割を持ち自分でボールを取りに行くなど、主体性を持って参加している様子でした。

地域共生の具体的な取り組みになっていると感じました。

外国人職員と共に働く

社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホームフォーライフ桃郷

鬼島 勇太

(コミュニケーション 教育)

目的

現状、福祉業界の人材不足は深刻な問題となっている。今後、施設運営を行っていくうえで外国人の協力は重要になってくると思われる。しかし、外国人職員が介護職として働くには、言葉の壁や文化の違いなど様々な問題がある。特別養護老人ホームの介護職として外国人職員が日本人と一緒に働ける環境づくりを目的とした。

発表を終えて

鬼島 勇太 (社会福祉法人寿心会
特別養護老人ホームフォーライフ桃郷)

今回初めて参加させていただいたが、さまざまな内容の発表があり、非常に勉強になることが多かった。発表させて頂いたことで、改めて自分たちが取り組んできた内容と今後やらなければいけないことを再認識することが出来た。また発表後、質問者から研修内容と同じように悩んでいるという施設があった。

人材不足や外国人とのコミュニケーションの問題は福祉業界全体の大きな問題であると思われる。

同じように人材不足や外国人とのコミュニケーションで悩んでいる施設に少しでも今回の内容が参考になればいいと思う。



助言者コメント

佐伯 徹郎 (日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授)
高橋 裕子 (玉川総合支所健康づくり課長)

離職率などのデータを示しながら問題を明確にし、その解決のための具体的な取り組みを紹介されて、わかりやすく、実践的にも有用な研究発表だと思いました。

もう少し、「意識付け」「関係性」「意識の向上」「環境整備」などについて、何らかの指標・基準を用いて少し客観的な評価もあると、より研究としての価値が高まるかもしれません。

実践者として大変ご多忙にあると思われる中、貴重な実践発表でしたので、ぜひ関連する様々な方々と共有、意見交換して頂きたいと願っております。

外国人介護人材の導入成果

－これからの介護現場に必要な人材－

LPC 学園グループ 一般社団法人日中人材育成協会東京支部 介護事業部
板垣 貴宏社会福祉法人ノテ福祉会 グループホームノテ深沢
HTOO TIN ZAR KHAING

(外国人介護人材 外国人材向け介護教育 受入事業者の在り方)

目的

介護現場の人材不足は、依然変わらず増加の一途を辿っている。しかし現場は「誰でも良い」訳では決して無い。むしろ「育成の見込みがある人材」「良質の人材」を求めている。この様な背景から我々LPC 学園グループは「単なる介護人材」や「単なる労働者」として、外国人技能実習生を介護事業者の方々に提示せず、あくまでも「継続教育を前提とした外国人材」の提案を積極的に行い『継続教育と現場実践＝利用者（入居者）・事業者への貢献』に繋がると考え事業を推進してきた。

発表を終えて

板垣 貴宏 (LPC 学園グループ
一般社団法人日中人材育成協会東京支部 介護事業部)

質疑応答を含め 20 分程度の中で、区内で活躍する外国人介護技能実習生の成長と成果を参加者の方々にお伝えする事は、当初限界があると感じておりました。しかし、外国人介護技能実習生自らのスピーチが始まると、参加者の方々の温かい眼差しと聞き入って頂いている様子を見て、今回の発表趣旨である外国人介護技能実習生に対する「継続教育」が、実習生本人はもとより、受入法人・企業、そしてサービスを利用する区民の方々にとって、有意義であるという事が、伝わったと痛感しております。終了後には学生の日本語レベルの高さ等についても御感想を頂きました。

このような機会を頂きお伝え出来た事を感謝し、これからも区内の外国人介護技能実習生の継続教育に邁進していく決意を新たに致しました。



助言者コメント

佐伯 徹郎 (日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授)
高橋 裕子 (玉川総合支所健康づくり課長)

技能実習生から日本の資格を取得され、日本の介護事業所で正規採用されたのちにフロアマネジャーになられた方に、私もお会いしたことがあります。

この発表では、専門知識や技術、日本語の習得だけでなく、日本の文化や生活習慣、ゴミの分別などの社会的なルール等、日本の環境に社会人として適応していくための総合的な教育に尽力されていることがわかりました。

HTOO さんのスピーチも大変流暢で素晴らしかったです。ご健康とご活躍を心から願っています。

けやき学級の障害のあるメンバーと仲間たちの活動

－共に学ぶ自立と仲間づくり－

けやき学級

景山 香代、上田 めぐみ、鬼塚 正徳

世田谷区教育委員会事務局生涯学習課

吉田 周平

(社会教育 共に学ぶ)

目的

けやき学級は1976年に当時の光明養護学校の卒業生を中心として、「障害者の自立と社会参加」を目的に世田谷区の青年学級事業をもとに発足したグループです。現在はいずみ学級、たんぽぽ学級などと同じく世田谷区教育委員会事務局の主催事業として、参加メンバーの自主活動を通じた「学びあい」を基本に活動しています。このけやき学級の40年間の今に至るまでの歩みと、現在の活動とその意義を紹介します。

発表を終えて

鬼塚 正徳 (けやき学級)

「けやき学級」は、47年間活動を継続していますが、この福社區民学会はこれまでの活動の意味を整理する良い機会となりました。ただ、聞いていただく聴衆が少なかったことや、会場から質問が出なかったことは残念でしたが、助言者から「このように長く活動を続けることができたのはどうしてか？」との質問を頂きました。以後この質問の回答を発表者同士で熟考しています。

長い活動の間には、社会情勢も、人の意識も、参加メンバーも、実施プログラムも変わってきた中で、けやき学級が世田谷区教育委員会の主催事業であって参加メンバーの自主性を尊重してきたこと、この学級を始めた当時のメンバーの活動理念がしっかり伝えられてきたことなどの重要性を再確認しました。



助言者コメント

佐伯 徹郎 (日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授)

高橋 裕子 (玉川総合支所健康づくり課長)

光明養護学校の卒業生の方々と世田谷区の青年学級の方々が出会い、40年にわたって新たなメンバーも加わりながら、けやき学級の活動が続いてきたという事実がとても重みをもって伝わりました。「当事者が自分に必要だと思うことを主体的にやってきたから続いた」という言葉が印象的でした。想いを共有する人々の中で、共生社会は既に始まっているということを再認識させられる発表でした。



口頭発表 第5分科会

【233教室】

進行役・助言者

大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）

徳永 宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル
1	石野 郁花	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	モンテッソーリケアによる認知症の介護実践 －QOLの向上に向けて－
2	市宮 奈那江 吉田 雅子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	よりそう 今までも これからも －きづき つなぎ むすぶ－
3	信夫 武人 大西 統	NPO 法人都民シルバーサポート センター	NPO 法人との連携によるおひとりさま高齢者 支援 －これからの地域包括ケアシステム構築の上で 必要なこと－
4	吉野 清美	城南食支援研究会	「最期まで食べられることを楽しめるまちを つくろう」 －城南食支援研究会の活動－
5	信岡 裕紀 山田 貴之 米澤 大我	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム	クラスター収束後のいつもの生活を取り戻す 過程について
6	石井 文代 大場 哲也 佐藤 歩	医療法人社団プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町	「自宅で暮らす」を継続するために看多機が できること －A 様の場合－
7	島田 実桃 木嶋 由実 小関 綾乃 春田 霞月 箱山 栞莉 寺口 侑和 松原 映真 小野寺 莉子 小塚 光咲	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	世田谷区の A 高齢者施設における活動の実践と 学び －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－

進行役・助言者



大熊 由紀子
(国際医療福祉大学大学院教授)



徳永 宣行
(世田谷区介護サービスネットワーク代表)

世田谷区のA高齢者施設における活動の実践と学び

—ソーシャルワークプロジェクト活動を通して—

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 1年

島田 実桃、木嶋 由実、小関 綾乃、春田 霞月

箱山 栞莉、寺口 侑和、松原 映真、小野寺 莉子、小塚 光咲

(高齢者 関わり 支援)

はじめに

私たちは、単身世帯や何らかの事情により一人で暮らすことが困難になるなどの生活課題によって孤立してしまう高齢者の新たな居場所づくりに興味・関心を持ち、高齢者支援について着目し、活動していきたいと考えた。世田谷区における高齢者施設の活動を通して、住居付き介護施設での生活や支援を学び、高齢者支援の現状や現在の私たちにできることや求められていることを知りたい。専門スタッフと利用者の方との信頼関係の構築について、実際の活動を通して学んでいきたい。また、よりよい支援を提供するために、協働することの重要性について実際の活動で学んでいきたい。さらに、世田谷の高齢者の充実した生活に貢献するという目標を達成していくために、今の自分たち一人ひとりが行うことのできる企画を考え実践し、学びを深めることを目的とした。

発表を終えて

島田 実桃、木嶋 由実、小関 綾乃、春田 霞月、箱山 栞莉
寺口 侑和、松原 映真、小野寺 莉子、小塚 光咲
(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 1年)

今回の発表を通して、今の私たちに何が求められているのか、そして何ができるのかを明らかにすることができました。また、現役の医療ソーシャルワーカーの方からご助言をいただき、実際に自分たちで計画を立て施設で活動させていただくことは、貴重な体験であることに気づきました。発表後の質疑応答では、お世話になった施設へのアフターケアに関するご質問をいただき、アフターケアについても考えていきたいと感じました。

今後、より専門的な知識を身につけ世田谷区の福祉に貢献できるよう精進していきたいです。

貴重な経験をありがとうございました。



助言者コメント

大熊 由紀子 (国際医療福祉大学大学院教授)

徳永 宣行 (世田谷区介護サービスネットワーク代表)

学生の皆さんが高齢者支援に興味をもって、さらに実際に介護施設に直接、伺って様々な活動を通じてご利用者の皆さんと時間を共有したことは、とても素晴らしいことだと思いました。

ご自身の祖父母以上に年齢が離れている高齢者に対して「自分たちに何ができるのか?」「どんなことに興味があるのか?」とチームで考え様々なアイデアを出し合い、実践したことにより得ることができた経験は、今後の皆さんのさらなる学びに必ず繋がるものだと思います。

これからの皆さんの活躍を、心からお祈りしています。



口頭発表 第6分科会

【244教室】

進行役・助言者

森田 規子 (教育相談課教育相談専門指導員)

橋本 睦子 (社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与)

	発表者	所属	タイトル
1	北畑 美奈	東京リハビリテーションセンター 世田谷 児童支援事業所ぶらみんぽーと 放課後等デイサービス	遊びを通じた子どもとの関わり ープレイセラピーの実践ー
2	永山 柚月	社会福祉法人たちばな福祉会 RISSHO KID'S きらり代沢	一人ひとりのつぶやきを大切にした保育 ー夢を叶えるためのヒト・モノ・コトー
3	大山 さなみ	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	個の育ちを支援する関わり方を考える ーA君との関係性構築に向けてー
4	森江 智孝 金田 英也 岸井 丈	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所	安定した通所を目指して ー本人を知る事、実習所を知ってもらう相互理解 から学んだことー
5	渡辺 聡司	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	慣れない環境の中で睡眠がとりにくい利用者 と関係を深めて安心感をもって睡眠が取れるような 関係性をつくることを目指して
6	千葉 美瑠 齋藤 ファトゥ 樹音慈縁 藤野 健太 川谷 真生	日本大学文理学部 社会福祉学科 4年	せたがやゼミナールの活動と課題
7	田島 和美	社会福祉法人せたがや檜の木会 まもりやま工房	「受容」に求められることを考える ー新たな出会いからー

進行役・助言者



森田 規子
(教育相談課教育相談専門指導員)



橋本 睦子
(社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与)

遊びを通した子どもとの関わり

－プレイセラピーの実践－

東京リハビリテーションセンター世田谷

児童支援事業所ぷらみんぼーと 放課後等デイサービス

北畑 美奈

(遊び 受容と共感 自己表現)

目的

プレイセラピーとは「遊びを通して子どもの発達を促進し、関係性を構築する心理療法的アプローチ」である。子どもは遊びを通して人に気持ちを伝え、ストレスに対応し、集中力や自信を身に付けていくと考えられている。当事業所での心理師によるプレイセラピーの実践を紹介する。

発表を終えて

北畑 美奈（児童支援事業所ぷらみんぼーと
放課後等デイサービス）

発表後に「なぜ放課後等デイサービスでプレイセラピーをしようと思ったのか？」という質問がでた。その質問を受けて、自分がなぜプレイセラピーを始めようと思ったのかについて改めて考えた。もともと児童支援事業所ぷらみんぼーとの放課後等デイサービスではグループ活動が主流だった。グループには気持ちの敏感さがあったり、癩癩をおこす児童がおり、そのような児童は集団の前に（または並行して）個別アプローチが必要だと感じた。そのため、児童が安心して取り組める個別のアプローチであるプレイセラピーを始めるに至ったのだった。

発表をしたことで今一度「プレイセラピーとは何か」「子どもにとって、なぜ必要なのか」ということについて考えることができ、大変有意義な時間となった。



助言者コメント

森田 規子（教育相談課教育相談専門指導員）

橋本 睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害支援局参与）

子どもも大人も、遊びは日常から少し離れて、生きるためのエネルギーを活性化する大切な営みです。特に、子どもは誰かの言動を模倣したり、何かになりきってごっこ遊びに夢中になるなどで自ら心の成長発達を促進させています。本発表は、小集団による療育支援だけでは緊張が弛まず、自分らしく表現することに不安を感じやすいなどの子どもに、援助者が遊びを介した個別の心理的支援（プレイセラピー）を導入して心理的発達の促進と日常生活の充実を目指した事例でした。

慎重に対象児を選び、同時に保護者援助を心がけたことが有効な支援につながったと思います。

**慣れない環境の中で睡眠がとりにくい利用者と関係を深めて安心感をもって
睡眠が取れるような関係性をつくることを目指して**

社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園

渡辺 聡司

(関係性の構築)

目的

ショートステイ利用時や宿泊訓練など、慣れない環境の中で睡眠が取りにくいAさん。おおらか学園でも施設内宿泊に向けてどのように安心して落ち着いて睡眠が取れるかを再度Aさんの立場に立って、日々の支援を振り返りながらAさんにとっての安心感と信頼感を改めて深めていく。その為に日々の生活から職員との関係を見直し、Aさんにとっての安心感や信頼感を得られるように支援する事を目標とした。

発表を終えて

渡辺 聡司 (社会福祉法人嬉泉
子どもの生活研究所 おおらか学園)

今発表に向けて改めてAさんと生活・活動場面での関わりを増やしましたが、思う通りには事は運びませんでした。しかしAさんの事を考える良い機会になりました。発表は自分以外の方達の発表も興味深くテーマに沿っての内容は日ごろの業務から共感出来るものも多々見られて良い刺激になりました。

質疑での「ジェスチャーは職場では引き継がれているのか？」に関しては諸先輩から「Aさんは〇〇を訴えてきているんだよ」とそのジェスチャーの意味を教えてもらいますが、まずは職員自身が「Aさんは何が気になるのだろうか？」とAさんの気持ちを思い、受け止めて関わっていく事が大事だと考えています。



助言者コメント

森田 規子 (教育相談課教育相談専門指導員)
橋本 睦子 (社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与)

今回は、慣れない環境でも安心して睡眠がとれるように、職員との信頼関係を築こうとする取り組みでした。発表同様、私たち支援者は、こだわり行為が承認されることで利用者が、安心するという経験を日々しています。また、安心のための確認行動が、かえってこだわりになって止まらなくなることもしばしばです。利用者が、自分らしい生活や人生を送れるためには、やはり支援者の役割が極めて重要だと思います。支援を模索し、繰り返しチャレンジする中で信頼関係を深め、ともに歩もうとする姿勢が発表には見られます。そこから次へのステップが見えてくると思います。

今後も利用者とのコミュニケーションの手段を増やし利用者と共に歩む取り組みに期待しています。

「受容」に求められることを考える

－新たな出会いから－

社会福祉法人せたがや檜の木会 まもりやま工房

田島 和美

(受容 障害理解 利用者主体)

はじめに

昨年度も同様の内容で発表をした。その際、「受容」とは、とても奥深く、様々な考え方から議論に転じるもの、と講師の先生から評価をいただいた。自分の発表がどう伝わったか、と振り返ることも含め、まとめることや伝えることの学びとなった。

今年度人事異動により、利用者さんとの新しい出会いがあった。安心できる関係構築のため、受容的な関わりを意識している。「どんな人？」とお互いが知るために、また、利用者お一人おひとりが、5年後10年後にその方らしく過ごせる支援のために、「受容」や「寄り添う」ことを改めて考える機会となっている。昨年度から大きく変わらないながらも、「受容」の理解を深め、自分の支援の軸となるものを確認できるレポートになればと思う。

発表を終えて

田島 和美 (社会福祉法人せたがや檜の木会 まもりやま工房)

昨年度と同じ内容で、自分なりに①相手に伝わりやすく②何を伝えたいかのポイントをまとめる③自分自身の支援の軸となるものを再確認する、という目的で発表を行いました。が、「まだまだ不十分」という感想です。利用者の方の言動に対して「なぜ」や「本当の思いは」と考えることの大切さを講師の先生にもお話しいただけたことは、今後の支援の力になりました。

発表を続けることで、少しずつでも自分の学びになればと思い、毎年、参加させていただいていますが、丁寧にもう少し時間をかけて、発表内容の充実につながるよう意識して、来年またチャレンジができればと思います。

ありがとうございました。



助言者コメント

森田 規子 (教育相談課教育相談専門指導員)

橋本 睦子 (社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与)

発表者は、福社区民学会の常連さんです。今回も対人援助の原則である「受容」を継続課題としてとりあげています。利用者とのエピソードを丁寧に考察し、利用者の気持ちを汲み取っています。その姿勢は、大変、感銘いたします。そして利用者から表出されることばや態度を表面的にとらえるのではなく、その奥にある「本当の思い」を理解したいと考えています。

今後も「利用者は何ぞこう言うのだろう、なぜこうした態度をとるのだろう」という常にその背景を掘り下げていくことでより個別性や主体性を尊重できるよう継続してください。また他のスタッフ視点も取り入れチームアプローチすることにより視点を拡大することも大切だと思います。



口頭発表 第7分科会

【243教室】

進行役・助言者

神田 裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

伊藤 美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

	発表者	所属	タイトル
1	佐川 武 玉田 清朗 浅見 貴和 吉廣 祥子 黒野 大希	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	介護職員による高度に変形した爪へのフットケア の実践
2	島崎 亮輔	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園	アシストスーツの活用 ー腰痛予防と軽減を目指してー
3	小松 さやか 小菅 延子 小林 朝子	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	最期まで自分らしく ー第二の我が家は、どうあるべきかー
4	星 有美 原 仁美	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻 社会福祉法人こうれいきょう 池尻介護保険サービス	可能性と生きがいづくりをデイサービスで！ ーデイホーム池尻の個別対応ー
5	竹内 洋子 渡辺 三恵子 和仁 智子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	最期まで口から食べるための専門職グループ 研究会「もぐもぐチーム」の取り組み
6	宮本 真理子	社会福祉法人奉優会 優つくりデイサービス喜多見	寄り添う ーご本人、そしてご家族様の思いを受け止める 最後の受け皿としてー
7	藤本 祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	皮膚反応に着目して、体の動きを変える

進行役・助言者



神田 裕子

(東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)



伊藤 美和子

(玉川総合支所保健福祉課長)

アシストスーツの活用 －腰痛予防と軽減を目指して－

社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園
島崎 亮輔

(道具 業務効率化 腰痛)

目的

腰痛は介護の職業病と言われている。その要因は中腰姿勢や物を持ち上げる動作に多く見られる。そこで、腰痛のサポート範囲がマッチングしている介護用具を使用する事で腰痛の軽減が図れると考え、アシストスーツの使用を通して腰痛の軽減、予防効果を図ることを目的とした。

発表を終えて

島崎 亮輔 (社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園)

現状、アシストスーツの使用は定着しているとは言い難く、実際使用しているのは、腰痛が悪化した際に僅かな人数がピンポイントで使用している状態です。「この効果のありがたみは、痛めてからじゃないとわからない」との意見もあり、予防効果を目的とした使用への意識付けの難しさも感じます。

アシストスーツに腰痛軽減効果が確かに感じられるとの知見を得る事が出来ている為、今回使用した物に限らずに、様々な用品を試し、自身が使い続けられる、自身に合ったアシストスーツを見出せる様に支援をすることも定着に繋がるのではないかと考えます。



助言者コメント

神田 裕子 (東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)
伊藤 美和子 (玉川総合支所保健福祉課長)

介護技術を熟知しておられても、日常業務の中では、中腰姿勢や物を持ち上げる動作が多く、腰痛等を引き起こす機会が多いのだろうと思います。

ご発表では、様々なアシストスーツの特徴や、メリット・デメリット等を詳細に調べ、表にまとめ説明いただきました。また、実践研究結果から、使用方法や環境整備が必要だとのことでした。

今後も継続して研究を続けられ、本学会でご報告ください。その結果を介護職皆さんの腰痛等の軽減と予防対策につながることを期待しています。

最期まで自分らしく

－第二の我が家は、どうあるべきか－

社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿

小松 さやか、小菅 延子、小林 朝子

(ターミナルケア 独居)

目的

小規模多機能ホーム三宿のサービスの事例として、独居でターミナルケアを行う方がいた。そのケアを通し最期まで自分らしく生きる為には、どのような関わりやサービスが必要なのかについて考えさせられた。これからの少子高齢化社会に向けて、私たちにできることは何かを検討した。

発表を終えて

小松 さやか (社会福祉法人こうれいきょう
小規模多機能ホーム三宿)

今回の発表を通して、自宅で最期まで過ごしたいという気持ちに対してどのように関わっていくことができるのか、医療・福祉・介護のみんなで考え、サービスを行いながら、寄り添うことの大切さを実感したからこそたくさんの方に事例として伝えることができ、とても嬉しく思います。

これからも、様々な方々と関わっていく中で、小規模多機能型居宅介護だからこそできるサービスを提供して、お一人おひとりが自分らしく過ごしていただくことを大切にしていきたいと思います。



助言者コメント

神田 裕子 (東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)
伊藤 美和子 (玉川総合支所保健福祉課長)

小規模多機能ホームについて「第二の我が家」と銘打って、そのご利用者様がよりよい最期を迎えられるよう、職員だけでなく、ご家族様やお友達も一緒に考えていくことができ、一つひとつ実践を繰り返し、そして、最期はゆっくりと旅立たれていったという、本当によい事例であった。パワーポイントの心が温まるようなイラストも非常に良かった。

こうした事例が増えるよう、今後も取り組んでいただきたい。

最期まで口から食べるための専門職グループ研究会「もぐもぐチーム」の取り組み

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課
竹内 洋子

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム
渡辺 三恵子

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋
和仁 智子

(多職種協働 シームレス連携 経口摂取)

目的

最期まで口から食べることは多くの人の願いであり、人間の最も自然な摂理である。世田谷区社会福祉事業団の訪問看護課では、「最期まで口から食べる」ことを事業計画に掲げ、2015年に、食べることについて研究するグループ「もぐもぐチーム」を発足した。メンバーは、言語聴覚士、管理栄養士、介護福祉士、歯科衛生士、看護師など訪問看護課以外から課を超えて構成され、在宅と施設のシームレスな質の高いケアを目指している。

発表を終えて

竹内 洋子 (社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課)

渡辺 三恵子 (社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム)

和仁 智子 (社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋)

多職種が互いの専門性や職能を理解し協働することで、多角的で的確な支援方法が得られ、「最期まで口から食べる」ための質の高いケアにつながっていることや、枠を超えてシームレスな連携を行っていることを発信することができました。

今回の発表のために、「もぐもぐチーム」の活動を振り返りまとめていくことで、改めて活動の有用性や今後取り組みたいことを確認する良い機会となりました。

今後も、さらに情報の共有、研究、企業や研究機関との連携などを通して、利用者様の「最期まで口から食べる」ことを叶えていく活動を続けていきたいと思えます。



助言者コメント

神田 裕子 (東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)

伊藤 美和子 (玉川総合支所保健福祉課長)

多職種との連携が重要であることは知られているが、多職種だからこそどう進めていくのが良いのか？意見が異なり悩むこともあったと思います。専門職が協働して、様々な視点から多角的に見るからこそ、利用者さんの安全性や正確性が高くなる。また、このような活動に取り組めることは、各事業団のリーダーや所属長の理解とサポートがあつてこそだと思います。

今後も企業との連携を含め、みなさんの専門性をより高めていただくとともに、円滑なコミュニケーションを重ね、「最期まで口から食べる」ための支援を続けてください。一人でも多くの方が食べるのが楽しくなり、生きる意欲につながることを目指してください。

みなさんの実践活動に敬意を表したいと思います。ご発表ありがとうございました。

寄り添う

－ご本人、そしてご家族様の思いを受け止める最後の受け皿として－

社会福祉法人奉優会 優つくりデイサービス喜多見

宮本 真理子

(寄り添う 思い 最後の受け皿)

目的

一般デイで過ごすことが難しくなってきたご利用者様、そしてご家族様が安心してご利用できるよう、一人ひとりの課題を抽出し問題を解決していくことを目的とした。

発表を終えて

宮本 真理子(社会福祉法人奉優会 優つくりデイサービス喜多見)

この度は稚拙な発表でしたが、このような場に出させていただき誠にありがとうございました。聴講された方より「うんうんと頷きながら聞いていました。」「発表があつという間に感じました。」というお言葉をいただきました。私たちがやってきたことが、このように共感していただけるということに、とても嬉しくありがたく思いました。

日々これでいいのか？と悩みながら利用者様と向き合っていますが、「このまま突き進んでいいんだ！」と、背中を押されたようで心強くも感じております。

まだまだ至らないことの多いデイサービスですが、これからもこのような交流を持ちながらたくさんの方の事を学び、もっともつご利用者様のため精進していきたいと思っております。



助言者コメント

神田 裕子 (東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)
伊藤 美和子 (玉川総合支所保健福祉課長)

社会や人との繋がりを失いやすく、新しい環境になじむことへの負担が大きいとされる認知症の方にとって、なじみの地域・人々とつながりを保ち続けることがとても大切なことだと感じたご発表です。

ご自宅で過ごされている認知症の方とご家族は、狭い世界に入り込み、孤立してしまう傾向がありますが、認知症になっても、重度医療が必要になっても、住み慣れた場所での生活支援をされ、一人ひとりに寄り添ったケアの提供は、容易なことではないだろうと思います。どの様な時も、ご本人とご家族の思いを大切に、寄り添ったケアをチーム一丸となって提供されている様子がよく伝わりました。

みなさんの寄り添う思いと日々のご努力に心から敬意を表します。

皮膚反応に着目して、体の動きを変える

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋

藤本 祥多

(筋緊張 皮膚反応 知覚)

はじめに、目的

これまで作業療法士として病院や訪問など、さまざまな現場で勤めてきた。その中で殆どの方から「リハビリをして筋力を付けたい」「リハビリで力を付けてほしい」と言われ、リハビリ＝筋力トレーニングとされているケースがとても多かった。勿論筋力も大事ではあるが、筋力を付けるための準備、筋の緊張を意識した関わりが大切であると考えている。そこで、今回その関わりとして、皮膚反応に着目したリハビリを担当利用者様に実施。その結果、姿勢の変化や動きの面で改善が見られたため、ここに考察・私見を踏まえて報告する。

発表を終えて

藤本 祥多（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

今回初めて、せたがや福祉区民学会で発表させて頂きました。皮膚反応というテーマで発表しましたが、「皮膚について」という視点が他職種の方にも通ずるところがあると思い選択しました。皮膚は筋・筋膜と間接的に繋がっており、対象者と接触するうえで全ての医療従事者が皮膚に触れているといえます。そんな関わりの深い皮膚から身体の動きが変わるということをお伝えすることで、介入時新たな視点が増えることに繋がるのではと思っていました。

診療報酬・介護報酬の改定に伴いリハビリサービスの規模は縮小しており、リハビリを多く受けたくても受けられない状況に陥っています。そんな中で看護や介護を受ける時にもリハビリの効果が得られれば、今まで以上に効率よく機能維持改善することができますし、それが今後の医療福祉において必要なことではないかと考えます。そのため皮膚反応というテーマを選びましたので、今回の発表は様々な職種の方に見て頂く機会となったので有意義だったのではないかと感じています。



助言者コメント

神田 裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
伊藤 美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

作業療法士による、実際のデモンストレーションも交えた発表で、1回のアプローチでは顕著な効果を目で判断することは難しかったが、アプローチの内容は、大変わかりやすいものであった。

また、質問が出たように、リハビリだけでなく介護等でも活用できるアプローチ方法であるが、今回の発表では症例数が少ないと感じた。

ぜひ、今後も研究を継続していただき、再度発表していただくことを希望する。

ワークショップ

「多様性を認め合う地域を目指す
～心でつながる居場所づくり～」



ワークショップまとめ



進行・小澤／皆さま、こんにちは。ワークショップの進行を務めます、日本大学文理学部社会福祉学科3年 小澤 保菜美でございます。よろしくお願いいたします。本日のワークショップは、学生理事3名、ワークショップ実行委員として東京農業大学、日本大学文理学部、東京都市大学、東京医療保健大学、日本女子体育大学より12名が、参加されている皆さまと楽しく活発な意見交換が行われるようにグループワークを進めて参ります。

それでは、本日の全体会Ⅰで行われました、社会福祉法人こころみる会統括管理者 越知眞智子先生の基調講演「障害者支援施設こころみ学園とそのワイン醸造場 ココ・ファーム・ワイナリーの歩み ～あったもがんばん～」をふまえグループセッションを行わせていただきます。

グループセッションについてご説明いたします。グループセッションの司会・進行・まとめは、学生実行委員、学生理事が担当します。基調講演をふまえ「多様性を認め合う地域を広げるには」について「日ごろ考えていること、取り組んでいること」「自分はどうありたいか」「地域の中で取り組みたいこと」などを各グループに分かれて楽しく話し合いしたいと思います。

それでは、14時35分まで30分間グループセッションを始めます。

～グループセッション～



小澤／皆さま、30分間のグループセッションありがとうございました。それでは、グループセッションのまとめに入らせていただきます。各グループ、2分ほどでご報告お願いいたします。

小澤／1 グループ 東京都市大学人間科学部児童学科 2年 笛木 優太さんお願いします。

笛木／私たちのグループで一番多く出たのは「多様性」という言葉でした。その中で、多様性の捉え方は、人それぞれ違うことが一番印象に残りました。多様性という言葉プラス要素として捉えたり、多様性という考え方が良くないのではないかと、という意見が出ました。多様性を探求していくにはどうしたらよいか話し合いになり、一人ひとりが考えることがとても大切だとまとめました。



知るためには、今日参加している人は、福祉に興味があったり、学校で学んだり、普段から接しているということもあると思いますが、知らない人や普段からあまり関わったり何も思っていない人に、伝えるためにはどうしたら良いかという話になりました。例えば、ニュースなどで福祉を知ることはもちろんですが、最近だと SNS が広まっているので、SNS など外部から意見を得ることもあると思うので、自分たちも発信していこうとなりました。

知ることも大事ですが、知ること以上に自分で体験し感じることもとても大事だと思うので、こういう機会に参加し、話し合いをおし学ぶことや実際現場に行き感じたことなどを話し合うことで、より一層理解が深まると思うので、しっかりやっっていこうと思いました。自分はどうありたいかという話になった際、考えを止めないことがとても大事だと思うので、この様な話し合いや自分で考えることに重きをおいて、いろいろな活動を行うことがとても大切となりました。

最後に地域の中で取り組みたいことは、いろいろな意見が出ましたが、自分たちだけではできない大きなことは始めにくいと思うので、まずは自分でもできるこういう話し合いや地域に行ってみるなど、小さなことから始めていくことがとても良いという意見にまとめました。

小澤／笛木さんありがとうございました。

小澤／2 グループ 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 3年 定方 美穂さんお願いします。



定方／私たちのグループは最初に、皆さんの多様性という言葉に対してのご経験を伺いました。

その中で特に議論にあがった話題として、普通の人って何だろうってことです。例えば、障害のある方の介助をしている方が、障害のある方と一緒にいたときに急に避けられてしまうという経験や、障害のある方がいらっしやるとみんなの注目が集まってしまうという経験から、見ない優しさもあるのではないかと話の中で、越知先生のご助言で、偏見のない目はどう

いうところからきたのかと話がありました。わからないことや知らないからこそ障害のある方や他の方への怖さやそういうものが生まれてくるのではないかという話になりました。

具体的に解決していく方法として、例えば、地域でお祭りや収穫祭などを行うことで、障害のある方や他の方がその地域に住む一員として過ごしていける場を作ること、地域の一員として馴染めるのではないかという話になりました。また、障害者の支援ではなく、一般企業と同じような形で授業を行っていく、地域で販売をしていくことで地域の中で当たり前に行うことができるという意見が出ました。みんなの意見として、そういうことが普通だよねと、みんなが思えるのが一番という意見にまとまりました。地域にいろいろな方がいて当たり前で、障害者やマイノリティの方などとカテゴライズするのではなく、そういう人もいるよねと、みんなが捉えられるような社会にしていくのが良いと結論に至りました。

小澤ノ定方さんありがとうございました。

小澤ノ3 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 2年 三沢 勝斗さんお願いします。

三沢ノ皆さんと最初に、福祉とはどのようなものを共有しました。そこで思ったのは、福祉学科や農業学科などいろいろな方がいる中で、福祉という言葉がいろいろな意味を持っている、いろいろな目線を持っているということがわかりました。



多様性という中には、結構多様性あるよねっていう話になり、その中でも、基調講演で話されていた障害を関係なくどういうふうにやったら、そういう障害があってもコミュニケーションを取れたり、同じ目線で立てるのかとなりました。話として出たのは、同じ目線で立ってあげよう、そのためにはまず自分の方から歩み寄ることが必要で、障害だからということで、そこで終わらせるのではなく、どうしたらその人に伝わるのか、どういうふうにしたらその人に分かってもらえるのか、ということをも自分で模索する、自己理解が大事という話になりました。そのために、普段から自分が障害などに興味関心を持つとか、どういうふうにしたらいいのかという事を考えることも大事だよねと話ができました。また、障害があるということで難しいこともあると思うのですが、その中でも相手がやりたいと思うことを尊重することを大事に、行動できると良いと話がありました。

地域の中で取り組みたいことは、地域でのイベントを行うことが大事ではないか話が出ました。地域のイベントは、一つだけではなくて、例えば、野菜を一緒に育てようとか、一緒にスポーツをやろうなど、お一人おひとり興味など違うので、皆さんといろいろなイベントや活動を行い、共有を深めていくことが大事だと思いました。地域のイベントだと積極的な方、消極的な方に分かれてしまうことについて、グループの中で話し合いが

できなかったのですが、今後は消極的な方に対してどのようにアプローチしていくことが大事なのが課題になると思いました。

小澤／三沢さんありがとうございました。

小澤／4 グループ 東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科 3年 清田 遥貴さん
お願いします。



清田／グループディスカッションをとおして思ったことは、知っていくということ、補い合うということ、関わり合うということが、皆さんと話した中で、重要なキーワードだと思いました。

グループの中で、アルバイトとして重度の訪問介護を始めた方が研修などを行うまでは大きな壁があったように思ったが、実際に行ってみたらそのようなことはなく、一人ひとりが同じ人間で能力が違って、それを補い合うということを知った話や福祉の仕事に就く人が不足していて、改善するために、小さな時から福祉への理解を深めて知ってもらうようにしていると言う話を聞き、まずは知っていくということが重要だと思いました。

関わり合うことについては、学童や特別養護老人ホームなどでアルバイトをしている人の話を聞き、その様な経験やこのような学会での話し合い、さまざまな世代や年齢の方、さまざまな分野の学生など、いろいろな考えを持っている人が関わり合うということは、福祉だけではなく多様性の輪を広げていけるのではないかと思いました。

小澤／清田さんありがとうございました。

小澤／5 グループ 東京都市大学人間科学部児童学科 2年 蛭間 晃雅さんお願いします。

蛭間／活発に意見がでたのは、意識してないと障害者というか、自分たちと違うところを見ることができないという点があがりました。

例えば、健常者に見えても吃音があったり、ADHD など発達障害があったりなど、自分たちが何か知らない障害があるということに気づくことができないので、自分たちから積極的に関わっていくことが大事だと思いました。

また、障害者の方とは対等な関係で、関わるときにこちらが身構えてしまうと、相手の方も身構えてしまうので、こちらがフレンドリーというか、身構えることなく関わったり、また何でも手伝うのではなく、何か困ったことがあった時に声をかけてくださいねという様に一言添えて、何か困った時に、すぐ声をかけてもらい助けられる関係性がとても大事だと思いました。 障害は誰にでも当てはまる、いつでも自分たち



が事故に遭い、障害者になるかもしれないので、自分たちで障害者について知ることが大事だと思います。他には、行政で見ると認知症の方の講座、高齢者・障害というように縦割りになっていることを見かけることもあり、地域の中で縦割りにするのではなくて、全員を巻き込んだような活動であったり、そういう会が開かれたらいいなということでまとまりました。

小澤／蛭間さんありがとうございました。

小澤／6 グループ 東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科 4年 松村 知比古さんをお願いします。



松村／多様性を認め合う地域を目指す心でつながる居場所づくりというテーマについて、皆さんの体験談を出していただきました。

空間共有として、健常者の方と障害を持った方が、同じ空間を共有することで分かり合える機会を作るとするのが大事という話になりました。

障害ということの基準は曖昧で、個々で判断基準が異なるよねということで、専門家の間でも、例えば、ADHDであるとか、そういった発達障害の判断基準というのは全く異なる部分があるので、そういった所から、例えば障害者手帳を発行するとかしないとかいう話でも、軸がぶれないように統一された部分っていうのは当然必要だと思いますが、そういった部分というのはどういうところから生まれるのかであったり。例えば、障害者手帳に関連すると、偏った見方をされてしまうと考える人やちょっと一安心するという方もいると思うので、そういった部分でも病気と人を分けて考えることが重要だという話になりました。

小澤／松村さんありがとうございました。

小澤／いずれのグループも、大変活発な交流が行われた様子が伝わってきました。ありがとうございました。

ワークショップの振り返りとして、こころみる会統括管理者 越知先生お願いいたします。

越知／本当に皆さんがいてくれて良かったと思います。

私は小さい頃から、障害のある人たちがなんとなくいてこういう人なんだろうなという、環境の中で育ったので、何の違和感もないんですけど、このグループの方たちは、どうして素晴らしい考えに至ることができるのか、みんなすごいと思うんで



すね。

お一人おひとりに聞きたいと思ったことは、この様なことに興味をもち考え方ができるのと言うことです。普通変な人は変でしょ。それを変じゃなくて、自分とは違うんだというようなスタンスの中で、きっとこの人生きづらいたらうなと思えたり、気づけること、本当にすごいと思いました。就職先がなかったら、うちに来てください。

例えば、こころみ学園にいる人たちは、専門の学校を出た人は本当に少ないんですよ。みんないろんなところをたどってきて、私のところにいらっしゃるのは、知的に障害を持っている人たちなんですけど、その人たちの魅力みたいなのって本当にすごいんですね。

私の施設の人の中でね、そういうことなんだって私すごく思ったのは、あんまり障害に関して違和感がない中で育ってきたので、障害って何なんだろうというのが本当にわからなかったんですよ。今でいうと多分自閉症だったと思うんですけど、落ち着きがなくて、一晩でもピョンピョン飛び跳ねて、1年に数回パタッとよく寝る子がいたんですね。保護者会がある日で、その日もよく寝ていて、いつも何回か寝だめをさせてあげないと言って、起こさないでいたんです。朝6時に起こしに行ったら、息をしていなくて、他の職員も駆けつけて対応したんですが大きな発作が起きて、亡くなったんですね。警察の方が入ることになったんですね。保護者会もあって親御さんが来ることになっていたんですけど、急いで来てくださったんですね。駆けつけてくれた、お母さんがこんなことを話してくれたんですね。

私今朝、夢を見たんです。どんな夢だったんですかって言ったら、私、この子と親子マラソンに出ると言う夢だったんですってね。親子マラソンって何かその様なことがあるんですかって言ったら、いえいえ、そんな事はなくて夢の中の話で、親子マラソンで、子供と一緒に手をつないでゴールに入る夢だったのと言う、話を聞いたんですね。検視を終えたお医者さんから、たぶん朝5時頃に亡くなったと話があって、お母さんに夢を見たっていうのは何時くらいの話なんですかって聞いたら、トイレに起きたのが5時頃だったと思うと言われて、あの子は最後にお母さんのところに行ったんだ。その親子マラソンで、いつもその子はピョンピョン跳ねているから、その時もパッと私の手を離して行っちゃってね、でも親子でゴールにしないといけないのにどうしようどうしようと思ってひょっとゴールの方を見たら、あの子がゴールのところでピョンピョン飛び跳ねていて、ああ良かったと思って目が覚めたのよって言われたんです。私はその話を聞いた時に、私はそういうことなんだと思ったんです。障害を持っている親御さんは、とにかくずっとその子の手をつないで、自分がなんとかしてあげなくちゃいけないと思って、最後の最後までゴールするんだってね。今回あの子の方が先にゴールに行ってくれたんですと、お母さんおっしゃってねすごいなと思ったんです。

その後、うちでお葬式を皆さんやるんですね、お葬式の時に、お父さんがすごく印象的な挨拶をされたんです。彼は、いろいろな所にドライブするのが好きで、お家に帰るとじっとしてないから、お父さんの運転で親子3人ドライブするんです。ただお父さんは、いつも自分たちが年を取って動けなくなって、車の運転ができなくなったらどうしようと思

っていたけど、今度はお前が自分で運転をして、好きなところに行けるね、生まれ変わったらって、言われたんですね。多分皆さんの中で、車の免許を取ることは、そんな大変じゃなくて、取れるかと思うんですね。障害を持っている人って、生まれ変わらないと、免許が取れないんだ、この人生の中で、障害を持っているってそういうことなんだっていうのを、私はその方たちのお話を伺って、すごくそういうことなんだって思いました。というようなことを、この仕事をしているとすごくいい話をね、自分で体験できるので、こういう仕事をしていて私は良かったと思っています。

越知／越知先生、ありがとうございました。

ワークショップの締めくくりとして、第15回大会実行委員長 杉原先生より、一言お願いいたします。



杉原／越知先生の講演会の時に、眞智子先生とは四半世紀のお付き合いだと申し上げたんですけども、お昼を一緒に取りながら話していましたら、どうも30年ほど経っていたようなんですね。

私の娘がまだ歩けない頃、抱っこひもの中に入っていた頃に、先生のところに学生と行って、一緒に園生の方たちと農業実習をさせていただきました。傾斜37度の斜面で原木運びをしました。登っては原木をいただいて、そして帰ってくる。でも、私の胸の中には、生後4~5ヶ月の赤ん坊が入っていたんですね。行くと、なぜか私には短くて軽いものを渡されているように思えるんです。渡している人は園生の人でした。なにか勘違いかな気のせいかなと思って、作業が終わって眞智子先生に尋ねました。これ気のせいのような気がするんですけど、やっぱり軽いものを渡してくださっているんでしょうかねと。眞智子先生がおっしゃったんですね。だって、あなた37度の急斜面登ってきて、しかもこの中には赤ん坊を乗せている、そういう人に重いものを渡せる、と言われたんですね。どういうことかということ、私はそういうようなことが、できないっていうふうに思い込んでいたんです。その園生の人たちは、重度の知的障害を持っている人たちが一生懸命この作業する農業の人たちなんですけども。何を言いたいかということ、差別はどこにあるのかということ、この自分自身の中にあつたということを経験しました。それを眞智子先生が教えてくださったのが、今から30年前になります。

この眞智子先生の所の施設っていうのはすごく変わったところですよ。門もないです、鍵もないです、結婚もOK、いわゆる福祉施設から言われると、うちはもう本当にダメダメって言われるところなんですよって、最初に説明してくださいました。

じゃあ、逆に福祉って何なのかな。私から見れば本当に生活そのものなんです。園生を子どもたちと称して、一緒に生活をする一緒のものを食べる、ですから、最初にお土産を持っていくときに、うちは何百人ですよって言われたんですね、その意味が行って

分かりました。100人以上のお土産持って行って。それは園生とか職員とかではなくて、家族だったら同じものを同じようにみんなで分け合って食べるでしょっていう精神なんですね。ですから、求められた数っていうのは、自分たち家族の数だったんですね。そういうような生活をベースにしているということ、それは施設であるか、施設でないか、それは地域から閉ざされているか、閉ざされていないか、ではないんじゃないかなと思います。

農業っていうのは、すごく地域の資源、それから地域の人々とすごく交流のある場なんですよね。それをこころみ学園さん、それからココ・ファームさんでは、農業を通じて地域とつながっている、ですから施設の中に閉じこもっている、そういうことでは決していない、ですから単なる形態で、入所型とか、それじゃなくて地域に出ましようということではなくて、地域の中に暮らし、そして地域の中で、最後、閉じていくという、その姿がこころみ学園さんでは、学べるということで、我々もここに通って農業を通じて、このようないろんな社会的困難を抱えている人たちを包摂できるのかということ学ばせていただいております。こういうような私たちの農学の方からのアクセスなんですけれども、今日皆さん、福祉の方からですね。これを契機にですね、ぜひ皆さんの交流を深めてですね、若い皆さんが次の世代をぜひ担っていくような人材になっていただけたらなと思います。

小澤／杉原先生、ありがとうございました。

本日のワークショップでは、ご参加の皆さまに協力をいただき楽しく交流することができました。ありがとうございました。

おかげをもちまして、ワークショップを無事、実施できました。心から感謝申し上げます。





全体会Ⅱ



大会総括

進行 東京農業大学 飯森 文平

飯森：ただいまからせたがや福社区民学会第15回大会全体会Ⅱを開催いたします。本日はご参加いただきありがとうございました。私は東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科の飯森 文平と申します。せたがや福社区民学会第15回大会の副実行委員長を務めております。全体会Ⅱの司会を務めさせていただきます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

発表者、進行役、助言者の皆様、また学生実行委員、学生ボランティア、スタッフの皆様、大変お疲れ様でした。本日はおよそ480人の方にご参加いただき、学生ボランティアをはじめ、多くの方に協力をいただきました。皆様、本当にありがとうございました。おかげ様をもちましてこの大会を無事に開催することができました。心から感謝申し上げます。

全体会Ⅱにおきましても、引き続き記録及び広報に使用するため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、不都合のある方は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけたスタッフにお申し出ください。

本日は基調講演に続き、49本の口頭発表、12本のポスター発表、ワークショップ、また区内障害者施設の販売、KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展、第15回大会・介護の日特別企画が行われました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの様々な会場の様子について、皆様からのご感想をお聞きしたいと思います。初めに口頭発表で発表された方、関様からご感想いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。



関：社会福祉法人奉優会 優づくりグループホーム鎌田の関 勝之です。本日は、昨今の介護現場で成長が著しいEPA介護福祉士の就労継続について発表させていただきました。私以外にも、外国人介護福祉士に関する研究発表があり、とても参考になりました。質問で受けた地域との交流手段については、現段階では模索中であり、しっかりお答えできなかったことが反省点であると思っています。また、総評でもお話がありましたが、外国人介護福祉士の在留資格の仕組み等知っていた事、現状の課題も理解いただけたことで、今後の外国人介護福祉士にいい影響が出ればと感じました。

飯森：ありがとうございました。学会は実践されている方が発表される機会が少なく、研究者の発表がメインになっている中で、この学会で本当に実践されている方がメインで発表されているのは、非常に実践的な学会で、だからこそ実践的なネットワークが出来上がっていく場になってくるという感想を強く持ちました。非常に盛り上がっている会場がたくさんあり、とてもいい学会だなという感想を持ちました。ありがとうございました。続きまして、ポスター発表から、HABING代表の熊谷様、お願いします。

熊谷：初めまして、HABING 代表の熊谷と申します。よろしくお願ひします。私どもは世田谷区の烏山の方で、日本で初めてのものを補助金も一切なく、株式会社が運営しています。今回初めて福祉学会に出させていただきます、少し目立つためにパネルだとかパワーポイントとか作成して参加させていただきます、とても多くの方に来ていただいていることはとても嬉しくなりました。色々な方が参加していることが素晴らしいと思ひました。本当にありがとうございました。



飯森：熊谷様、ありがとうございました。ポスター発表も、多様なテーマがあり、一口で福祉といっても考えるべき問題が非常に多いということを実感させていただきました。続きまして、助言者の第3分科会の向笠様から一言お願ひいたします。



向笠：壇上から失礼いたします。昭和女子大学の向笠 京子です。第15回大会の実践研究発表では、ポスター発表12、口頭発表49、全部で61のたくさんの発表がございました。世田谷区の福祉について様々な領域の方、また様々な視点からご発表されて、ご質問やご意見も多く、学びや気づき、新たな発見があり、大変有意義な時間となったと思ひます。学生の皆様は今回初めての方が多く、大変勉強になったと思ひます。

また、現場の皆様におかれましては、お互いの発表を聞くことでさらに刺激となり、いい経験になったのではないかとと思ひます。それぞれのご発表が、とても心温まる優しさにあふれた発表で福祉の輪が大きく、さらに広がったのではないかとと思ひます。本日は誠にありがとうございました。

飯森：続きまして、ポスター発表の進行役・助言者の田中様お願ひいたします。

田中：ポスター関係をさせていただいた世田谷区役所の田中 耕太と申します。ポスター発表で、皆さんスライドなど、色々、用意していただきましたが、発表時間がちょっと短かった。

ご質問のやり取りを考えると、全体のボリュームの関係もあると思うのですが、時間がもうちょっと延ばせればいかなと思ひました。それぞれコロナを経てですね、皆さん大変な思いをされたかと思ひますが、アフターコロナに向けて、それぞれ熱心に活動されていることを発表していただきました。

今日はどうもありがとうございました。



飯森：ありがとうございました。続いて今回ワークショップは、「多様性を認め合う地域を目指す〜心でつながる居場所づくり〜」というタイトルでしたけども、44名の学生さんが参加していただいて、活発な意見交換が行われました。今回、進行を務めた学生理事、学生実行委員の皆様には、教壇に上がって、ワークショップの報告、また皆様の感想を一言ずついただければと思ひますので、学生理事の皆様、学生実行委員の皆様は、感想コメントをお願いします。



小澤：日本大学文理学部社会福祉学科に所属している小澤 保菜美と言います。本日は貴重な機会に携わらせてくださり、本当にありがとうございました。諏訪先生の初めのお話でもあったように、学生がこのような場に出させていただくことってないと思うので、このような機会に携わらせていただけたことがとても良かったなと思い、また学びが深まりました。ありがとうございます。ワークショップでは他の方の意見を聞いて、今まで自分がしていたボランティア以外の様々なことも知ることができて、こういうボランティア方法もあるんだっていうことを知ることができました。また、他の分科会のお話を聞かせていただいて、こういうふうに福祉って広めていくことができるんだということも学ぶことができ、自分の中でインプットするだけじゃなくて、アウトプットすることの大切さについても学ぶことができました。

神崎：学生理事として関わらせていただきました昭和女子大学の神崎 野恵です。本日、せたがや福祉区民学会の大会に参加させていただいて、貴重な体験をさせていただきました、ありがとうございます。私はワークショップの方と基調講演を見させていただいて、基調講演ではこころみ学園での取り組みについて知ることができて、障害者の方が働けるようにという素晴らしい取り組みのことを知ることができました。そして、ワークショップでは同じく福祉を学ぶ人たちだったり、農業について学んでいる人たちだったり、いろんな人たちの体験を聞くことができたり、それぞれバイトであったり、実習であったり、そこで得たことであったり、普段私たちが考えていなかったことを聞くことができて、とても貴重な体験になりました。本日はこのような機会に呼んでいただけて、本当にありがたいと思っております。

定方：同じく学生理事を務めさせていただきました昭和女子大学の定方 美穂と申します。本日は貴重な機会を作ってください、ありがとうございました。ワークショップの方では、私のグループでは福祉を学んでいる方はもちろん、農業を学んでいらっしゃる方に参加させていただきました。教職を学んでいらっしゃる方がいて、学校だけではわからないような新たな視点を得ることができました。また基調講演をしてくださった越知先生も中に入ってくださいっていて、私たちの発言に対してすごく深く追求してくださって、それが自己覚知にもつながったかなって思います。本日の学びを大学の方にも持ち帰りたいと思います。本日はどうもありがとうございます。

雷：学生実行委員の日本大学文理学部の雷 霆でございます。本日は初めてのせたがや福祉区民学会で、日ごろ聞くことができない話を聞くことができ、とても嬉しかったです。また、みんなで話し合うのはとても重要な経験だと思います。障害の方々地域社会で十分に参加できるようにするためには、私たちが一丸となり、意識を深めていくことが必要だと思いました。本日は皆さん大変お世話になりました。ありがとうございます。

藤田：日本大学文理学部の藤田 優翔と申します。実はワークショップだけではなくて、今回、口頭発表もさせていただいたのですが、二つとも自分自身であまりやることではなかったので、本当にいい経験になったし、皆さんの前で喋るというこの機会も自分にとってはなかなかない機会なので、すごく練習にもなるし、本当に良い学会だなって思いました。ワークショップで様々な人の話を聞いたんですけど、例えば就労支援センターでアルバイトしている方のお話だったり、小さい頃、障害者と一緒に、障害を持つ方と一緒にインクルーシブ保育を受けていた方のお話を聞いたりして、自分自身にはなかった発想の見方をいただけたというか、自分の心の視野が少し広まったと思うので、本当にすごく良い体験をさせてもらったなと思いました。ありがとうございました。

三沢：実行委員に参加させていただきました日本大学文理学部社会福祉学科 2 年の三沢 勝斗です。今回のワークショップで、皆さんがそれぞれの福祉を持っているということがすごく印象的でした。その皆さんが持っている福祉を知るためにも、皆さんと交流しないといけないということが、ワークショップの中で一番印象に残っていることでした。また、最初のお話の中で、体験してみないとわからないことっていっぱいあるというお話が印象的で、今後、多様な社会というのを考えるためにもいろんな活動にこれから参加させていただけたらなと思いました。本日はありがとうございました。

清水：一日ありがとうございました。日本大学社会福祉学科 3 年の清水 万悠子です。今日一日、実行委員として活動に参加させていただきました。今回、最初の基調講演から始まって、農業や障害者支援、また地域福祉に関わる支援の内容を伺わせていただいて、とても参考になりましたし、私たち学生がこうやって学会に参加させていただける機会がとても貴重なので、とても勉強になりました。ただ一方で感じたのが今回、あまり参加されていない母子支援や、青少年の方にまつわる方々も巻き込んで学会に参加していかなければならないなと思いました。シビアな部分がたくさんあると思われますが、もっと開かれた福祉になるように世田谷区の取り組みが発展していき、自分もどんどん参加していきたいと思っています。今日は一日ありがとうございました。

湯澤：本日は貴重な機会をありがとうございます。駒澤大学の湯澤 紗英です。ワークショップで様々な学生の皆さんとか世田谷区内で活動されている方々からお話を伺って、自分と違う経験をしているからこそ、違った視点で福祉を捉えていたり、多様性やつながりっていつのを考えているんだなって感じて、自分自身、新たな視点とか新たな考えをすることができました。このように、貴重な機会がいただけたので、このつながりを大切にして、今後も自分の学習に活かしていきたいと思えます。本日は、ありがとうございました。

森：駒澤大学の森 香雅里です。本日は、このような機会を設けていただき、ありがとうございました。ワークショップでは、福祉の勉強している人たちだけではなく、他の分野を勉強している方や社会人の方の貴重な意見を聞くことができ、すごく学びになりました。また、基調講演や分科会の発表も見学させていただいて、今後の福祉の勉強に活かしていけたらなと思っております。本日はありがとうございました。

蛭間：東京都市大学の蛭間です。本日のワークショップに参加して、自分たちのグループでは意識をして周りを見ないと多様性であったりとか、障害のことに関して見えてこないよねっていう意見を活

発に交わしたことで、自分の中で改めてちゃんと周りを見ないと、多様性や障害についてまだまだ知らないことがあるなど改めて実感することができました。なので、これからはもっと自分の中で意識を高め、多様性や障害について目を向けながら、これからも勉学に励んでいきたいと思いました。本日は、ありがとうございました。

笛木：本日は一日ありがとうございました。東京都市大学 笛木 優太です。今日のワークショップを通じて、福祉に関して、普段そんなに考えないことだったり、自分は感じていたんだけど、これって本当にそうなのかなっていうのを確認できたりする、そういう場にはできたかなって思っています。ワークショップ以外でも、結構空いている時間があったりして、実行委員の方や、いろんな人と喋る機会があったんですけども、自分と同じ年代の学生さんがすごく多くて、そういう人たちとこういう明るい話をできるっていうのは、とてもいいことだなって思ったのと、自分自身すごく励みにもなったので、この経験を次に活かしていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

松村：東京農業大学 松村 知比古と申します。本日はワークショップの方で進行と発表をやらせていただいたんですけども、進行する中でちょっと興味深いなと思った点が二つありまして、どうしても障害を持っている方っていうのは、周りの方に理解をされにくいという部分が多いというのが現状でありまして、そういった部分を解消するためには、やっぱり空間を共有することが重要であるという話が非常に興味深かった点でした。その他、先生の方から、人生でいつ頃から障害者というものを意識したかっていう問いがあって、僕個人的には小学生の時から特別学級のようなものがあって、幼い頃から触れてはきたということもありますが、触れてこない方っていうのも多くいると思いますし、今後そういうものは教育だったり、社会的に解決していかなきゃいけない問題だなと改めて痛感いたしました。

今後こういった機会を多く設けていただくことで、もう少し理解が広まるのかなと思いました。本日はありがとうございました。

清田：東京農業大学の清田 遥貴と申します。僕は去年、学生ボランティアという形でこの学会に初めて参加させていただいて、そこの全体会Ⅱで、来年は実行委員でこの場に参加したいと思いますという宣言をしたんですけど、その宣言通り、まずは実行委員として参加できたことをとても嬉しく思います。去年はちょっと別の仕事があってワークショップに参加できなかったんですけど、今年は参加できるということでとても楽しみにしていました。実際、他校の方や他の先生方と交流できて、自分の力になったと思います。今回、結構ワークショップが楽しかったので、来年も参加できるようだったら、参加したいなと思います。本日は、ありがとうございました。

伊東：日本女子体育大学3年の伊東 茜です。学生実行委員をやらせていただいて、基調講演やワークショップに参加して感じたことは、一人ひとりがそれぞれ福祉についての専門性を学んでいて、意見交換をした時に様々な視点から捉えていて、物事の新しい見方に気が付くことができました。

これからはより一層、普段の生活の中で視野を広げて、自分にできることに取り組んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。

細野：日本女子体育大学3年の細野 友莉伽です。学生実行委員をやらせていただいて、私はワークショップの方に参加させていただいたんですけど、体育大生なので普段、障害者の方と関わる機会があまりなくて、電車やバスなどでたまに見かけるくらいだったんですけど、実際に障害者の方のそばについた方や実際に実習に行った方の話を聞いて、障害者の方に対するイメージが、遠くから見ているのと実際に隣で見ているのは全然違うことが分かりました。障害者の方への理解を深めていくためには、もっと関わる機会を増やしていけばいいんじゃないかなって思いました。

来年は日本女子体育大学で開催されるので、より良いものにしていただけたらいいなと思います。

飯森：理事の皆様、学生実行委員の皆様、本当にありがとうございました。皆様、一人ひとりの感想コメント、大変興味深く聞かせていただきました。本日は本当に学びが多かったと思います。ありがとうございました。続きましては、今回のワークショップに助言者としてご参加いただきました、ころみ学園の越知 眞智子様から一言いただければと思います。よろしくお願いいたします。

越知：本当に今日は素晴らしい会にお招きいただきました。ありがとうございました。私の話よりも、ワークショップで学生さんたちがこんなに生き生きとこんなに真剣にいろんなことを考えているっていうのが、私にとっては本当にいい勉強になりましたし、残念ながら全部は聞けなかったんですけど、分科会でそれぞれの現場でなさっていることも伺うことができ、私にとっては本当にいい勉強をさせていただきました。本当にありがとうございました。



飯森：越知様ありがとうございました。続いて本日は運営スタッフとして、会員大学より学生ボランティアにご協力をいただいております。学生ボランティアの皆様、ご起立をお願いいたします。

このようになりにたくさんの方の学生さんに、ボランティアとして今回運営等々ですね、大変ご協力をいただいております。

開催校の東京農業大学と、次回開催校の日本女子体育大学から一人ずつ、ご挨拶を一言いただきたいと思います。東京農業大学からはLang Kieu 様、日本女子体育大学から井戸 遥様、それぞれ一言いただきたいと思います。まずランさんお願いします。



ラン：東京農業大学国際農業開発学科4年生 Lang Kieu と申します。実行委員の皆さん、ボランティアの皆さん、スタッフの皆さん、今日一日お疲れ様でした。今回の学会を通して、私が特に印象に残ったことは、眞智子先生の全体会 I でのお話でした。

障害を持った方々がこころみ学園へ来た頃は、仕事はあんまりできなかったが、だんだん体で仕事を覚えるようになり、最終的に自分の仕事に誇りを持つことができるという姿に感動しました。それに、今回の大会を通して、他大学の皆さんと交流できるようになって非常に嬉しく思いました。来年の大会の開催時にも、今回以上の盛り上がり願っております。本日はありがとうございました。



伊藤：学生ボランティアの日本女子体育大学 伊藤です。

本日、ボランティアとして、基調講演と他大学の方とのワークショップを通して、いろいろなことを知り、考えることも多い時間を過ごすことができました。普段、障害を持った方との接点が少ないため、意見交換をした際、バイトで関わっている方がいたり、専門的に学んでいる方の生の話を聞くことができ、充実した時間を過ごすことができました。知らない、わ

からないが怖い、という考えになってしまっていたので、知ることを受け入れることが今の私たちには必要なのかと感じました。もっと視野を広げることで、今まで見えていなかった部分も見えてくると思うので、視野を広げ、今私たちに必要とされていることを考えながら行動していきたいです。

来年、日本女子体育大学で開催されるので、今日以上に盛り上げられるように頑張っていきます。本日はありがとうございました。

飯森：どうもありがとうございました。それでは改めまして、学生ボランティアの皆様、本日はどうもありがとうございました。いずれの会場も大変活発な交流が行われてきたという様子が伝わってまいりました。ぜひ、この大会の成果を明日からの実践活動や次回の大会につなげていければと思います。続きましては、次回の開催 第16回大会は日本女子体育大学にて令和6年11月に開催を予定しております。それでは日本女子体育大学 佐伯 徹郎先生より次回開催校のご挨拶をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

佐伯：今日はお疲れ様でした。日本女子体育大学の佐伯と申します。初めて参加させていただきましたが、最初に会長の諏訪先生のお言葉にあった通り、ユニーク、非常にいろんな方が関わって発表している、そして、やはり実践と研究というのはなかなか両立し得ないのですけれども、その両方から参加している、発表している人、特に実践面で、あるいは企業の方が発表している。非常に私は新鮮に感じました。

私は体育の人間ですけれども、やはり実践と科学、研究と実践、どう結びつけるかっていうのは非常に重要だと日頃思っています。でも、どうしても分かれて



しまうっていうのがありまして。私、ランニング学会というのにも入っているんですが、非常にオタクな学会なんですけれども、なかなか実践している人が発表するっていう機会が少なくて、なので、この学会というのは福祉という目的、目標はありますが、いろんな研究とか実践を結びつける一つのお手本になるような学会かなというふうに思いました。専門性は違いますけれども、このような素敵な学会がしっかり本学で開催され、より皆さんの充実につながるように努めてまいりますので、どうか来年よろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

飯森：佐伯先生、ありがとうございました。次回のせたがや福社區民学会の詳細が決まり次第、ホームページなどでお知らせいたします。次回もぜひお誘い合わせの上、ご参加いただきますよう、よろしく願いいたします。無事に第15回大会が開催できましたことを重ねて御礼申し上げます。

以上をもちまして、名残惜しいですが、せたがや福社區民学会第15回大会を終了いたします。なお、イブニングセミナー懇親会は本教室を出て正門に向かって左側にあります二階建ての国際センターという建物で開催いたしますので、申し込みいただいている皆様はそちらの方にご移動いただければと思います。

皆様、本日はありがとうございました。



第15回大会実績

参加者数 493人

内訳) 来場者 324人

当日スタッフ、理事等役員 169人 (うち学生ボランティア 77人)

- ・全体会Ⅰ 139人
- ・分科会 (各発表終了時人数: 単位 人)

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
第1分科会	13	14	15	29	23	13	37
第2分科会	21	29	35	33	32	21	27
第3分科会	37	41	43	20	23	35	28
第4分科会	13	23	20	30	10	15	10
第5分科会	21	22	12	7	10	18	14
第6分科会	15	18	18	25	18	20	20
第7分科会	35	20	13	26	35	28	30

- ・ポスター発表 (コアタイム時人数: 単位 人)

発表番号	1	2	3	4
第1会場	20	20	20	20
第2会場	20	20	18	15
第3会場	20	24	25	

- ・ワークショップ 44人
- ・「第15回大会・介護の日」特別企画 (延べ人数: 単位 人)

住み慣れた地域で安心して暮らし続けるために ~世田谷区 認知症とともに生きる希望条例 令和2年10月施行~	30
介護サービスネットワーク福祉用具連絡会 福祉用具展示・体験会	75
介護サービスネットワーク訪問介護連絡会	90
非常時にも役立つ介護職・試食 キューピー株式	30

- ・全体会Ⅱ 142人

その他

- * 手話通訳及びパソコン文字通訳をお願いしました。
- * 会員大学 (昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、東京医療保健大学、東京農業大学、日本女子体育大学) の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影等の大会運営にご協力いただきました。

大会プラス

- KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展
- 区内障害者施設手作り品販売

KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展

せたがや福祉区民学会会場ロビーで、「KAiGO PRiDE@SETAGAYA」の写真を展示しました。
22人17枚の写真とメッセージから介護の仕事の“誇り・やりがい”を発信しました。



区内障害者施設手作り品販売

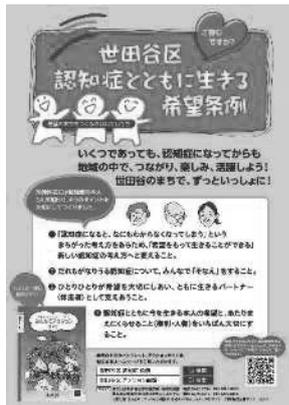
区内8ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。



「第15回大会・介護の日」 特別企画

- 住み慣れた地域で安心して暮らし続けるために～世田谷区認知症とともに生きる希望条例 令和2年10月施行～
- 介護サービスネットワーク福祉用具連絡会
福祉用具展示・体験会
- 介護サービスネットワーク訪問介護連絡会
- 非常時にも役立つ介護食・試食
キューピー株式会社

住み慣れた地域で安心して暮らし続けるために
～世田谷区認知症とともに生きる希望条例 令和2年10月施行～



世田谷区認知症とともに生きる希望条例のチラシや認知症ご本人の声が書かれたチラシ、駒澤大学の学生が作成したポスター、介護者の会・家族会パンフレットなどを展示しました。



福祉用具展示・体験会
介護サービスネットワーク福祉用具連絡会による福祉用具展示・体験



コミュニケーションロボットの展示



介護リフト体験



歩行器等各種福祉用具の展示



電動車椅子体験

訪問介護連絡会
介護サービスネットワーク訪問介護連絡会による自転車アイテムの展示

訪問介護ヘルパーによるヘルパーのための自転車アイテム

世田谷 訪問介護連絡会

共同
企画

MARUTO
OKUBO-SEISAKUSHO inc.
株式会社 大久保製作所

福祉の現場で働くみんなが元気になる！
訪問介護ヘルパーが考えた自転車アイテム見に来てね！



非常時にも役立つ介護食・試食
キューピー株式会社による介護食紹介、試食会





学会名簿

- せたがや福社区民学会役員名簿
- 第15回大会実行委員名簿
- 会員名簿

せたがや福社區民学会役員名簿

【順不同】

役職	氏名	所属／職名
会長	諏訪 徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
副会長	園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
理事	神田 裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
理事	向笠 京子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
理事	川上 富雄	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	杉原 たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
理事	佐伯 徹郎	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
理事	大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	長谷川 幹	世田谷公園前クリニック名誉院長
理事	田口 信彦	世田谷区生涯大学OB
理事	神崎 野恵	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	定方 美穂	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	小澤 保菜美	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
理事	手塚 由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
理事	樋口 美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
理事	徳永 宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	加賀 里実	世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会
理事	田中 耕太	世田谷区保健福祉政策部長
理事	山戸 茂子	世田谷区高齢福祉部長
理事	長岡 光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	板谷 雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	瓜生 律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	太田 一郎	世田谷区会計管理者
監事	牧野 まゆみ	NHK学園高等学校教諭

第7期（令和5年4月1日～令和7年3月31日）

第15回大会実行委員名簿

【順不同】

	氏名	所属/職名
◆ ◎	委員長 杉原 たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
◆	副委員長 飯森 文平	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科
◆		山田 隆一 東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科
◎		諏訪 徹 日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎		園田 巖 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◎		神田 裕子 東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
◎		向笠 京子 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
◎		川上 富雄 駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◎		横山 順一 日本体育大学体育学部健康学科教授
◎		佐伯 徹郎 日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
◎		大熊 由紀子 国際医療福祉大学大学院教授
◎		長谷川 幹 世田谷公園前クリニック名誉院長
◎		田口 信彦 世田谷区生涯大学OB
◎		神崎 野恵 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 (学部生)
◎		定方 美穂 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 (学部生)
◎		小澤 保菜美 日本大学文理学部社会福祉学科 (学部生)
◎		手塚 由美 地域コミュニティスポーツ コーディネーター
◎		樋口 美津子 子どもの生活研究所こぐま学園長
◎		徳永 宣行 世田谷区介護サービスネットワーク代表
◎		加賀 里実 世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会
◎		田中 耕太 世田谷区保健福祉政策部長
◎		山戸 茂子 世田谷区高齢福祉部長
◎		長岡 光春 世田谷区社会福祉協議会常務理事
◎		板谷 雅光 世田谷区社会福祉事業団理事長
◎		瓜生 律子 世田谷区福祉人材育成・研修センター長
◎		栗原 慎次 世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係

◆印=開催校委員 ◎印=学会理事

事務局	世田谷区福祉人材育成・研修センター
-----	-------------------

会員名簿

団体名	
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部児童学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	東京農業大学
8	日本女子体育大学
9	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
10	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所
11	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所
12	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立九品仏生活実習所
13	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立烏山福祉作業所
14	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 福祉事業部
15	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 市民活動推進部
16	社会福祉法人せたがや櫛の木会 下馬福祉工房
17	社会福祉法人せたがや櫛の木会 まもりやま工房
18	社会福祉法人せたがや櫛の木会 世田谷区立千歳台福祉園
19	社会福祉法人康和会 久我山園
20	社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所
21	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷
22	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ
23	社会福祉法人大三島育徳会 二子玉川地域包括支援センター
24	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム
25	医療法人社団慈泉会 介護老人保健施設 うなね杏霞苑
26	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園
27	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園
28	社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園
29	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園
30	砧地域ご近所フォーラム2024実行委員会
31	世田谷区
32	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
33	社会福祉法人 福音寮
34	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム（特養）
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム（特養）
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム（短期入所）
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム（短期入所）
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 寿満ホームかみきたざわ
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム太子堂
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷一丁目介護保険サービス
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢介護保険サービス
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花介護保険サービス
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂介護保険サービス
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上町地域包括支援センター
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター

会員名簿

団体名	
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢地域包括支援センター
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 松原地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションけやき
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション北沢
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション芦花
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 総務課
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷区福祉人材育成・研修センター
64	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
65	社会福祉法人正吉福祉会 きたざわ苑
66	世田谷区老人問題研究会
67	世田谷区介護サービスネットワーク
68	社会福祉法人奉優会 等々力の家 居宅介護支援事業所
69	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家
70	社会福祉法人奉優会 通所介護 等々力の家デイホーム
71	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢
72	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター
73	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所
74	社会福祉法人奉優会 喜多見居宅介護支援事業所
75	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター
76	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻
77	社会福祉法人奉優会 優づくり看護小規模多機能介護喜多見
78	社会福祉法人奉優会 優づくりグループホーム鎌田
79	社会福祉法人奉優会 優づくりグループホーム喜多見
80	社会福祉法人奉優会 優づくり小規模多機能介護奥沢
81	社会福祉法人奉優会 優づくりデイサービス喜多見
82	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家
83	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター
84	社会福祉法人奉優会 優づくり村下馬
85	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム
86	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬
87	社会福祉法人古木会 特別養護老人ホーム 成城アルテンハイム
88	社会福祉法人敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑
89	社会福祉法人敬心福祉会 烏山地域包括支援センター
90	有限会社 ケアステーションたね
91	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻
92	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿
93	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿
94	社会福祉法人こうれいきょう 池尻介護保険サービス
95	老人給食協力会ふきのとう
96	セントケアリまいん世田谷
97	一般社団法人 子ども・若者応援団
98	グループホーム成城さくらそう
99	東京リハビリテーションセンター世田谷
100	社会福祉法人なごみ福祉会 ここから

会員名簿

団体名	
101	社会福祉法人老後を幸せにする会 特別養護老人ホーム 深沢共愛ホームズ
102	社会福祉法人老後を幸せにする会 特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ
103	社会福祉法人青藍会 ハートハウス成城
104	認定特定非営利活動法人 語らいの家
105	株式会社 世田谷サービス公社
106	トラストガーデン桜新町
107	医療法人財団青葉会 介護老人保健施設 ホスピア玉川
108	NPO法人 せたがや子育てネット
109	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム なかまっち
110	公益社団法人 東京都世田谷区歯科医師会
111	公益財団法人 世田谷区保健センター
112	社会福祉法人敬寿会 東京敬寿園
113	東京ロイヤル株式会社
114	世田谷区柔道整復師会
115	社会福祉法人南山会 特別養護老人ホーム 喜多見ホーム
116	社会福祉法人東京有隣会 第2有隣ホーム
117	社会福祉法人東京有隣会 有隣ホーム
118	社会福祉法人緑風会 特別養護老人ホーム エリザベート成城
119	社会福祉法人楽晴会 世田谷希望丘ホーム
120	社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホーム フォーライフ桃郷
121	社会福祉法人七日会 せたがや給田乃社
122	社会福祉法人常盤会 ときわぎ世田谷
123	社会福祉法人聖救主福祉会 砧愛の園
124	社会福祉法人ノテ福祉会 ノテ地域ケアセンター深沢
125	一般社団法人 玉川砧薬剤師会
126	一般社団法人 世田谷トラストまちづくり
127	一般社団法人 輝水会
128	医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック
129	医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック在宅医療部 株式会社メディヴァ
130	医療法人社団プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町
131	シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
132	一般社団法人 つながりラボ世田谷
133	公益財団法人 世田谷区産業振興公社
134	特定非営利活動法人 視力障害者福祉協会
135	田辺薬局 三軒茶屋店
136	NPO法人 都民シルバーサポートセンター
137	一般社団法人 KAIGO PRIDE
138	株式会社 ホームサーチ
139	社会福祉法人たちばな福祉会 RISSHO KID'Sきらり代沢
140	NPO法人 わんぱくクラブ育成会
141	LPC学園グループ 一般社団法人 日中人材育成協会東京支部 介護事業部
142	株式会社 HABING
143	池尻・三宿 にんにん会

個人会員

53名

協賛企業等広告

一般社団法人 KAIGO PRIDE
シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
あらかわ総合保険
株式会社 世田谷サービス公社
東京ロイヤル株式会社
医療法人社団創福会 ふくろうクリニック自由が丘
有限会社 みやざき印刷
東京リハビリテーションセンター世田谷
富士エレベーター工業株式会社
株式会社 メディアチャンネル
医療法人社団 輝生会 在宅総合ケアセンター成城
森永乳業株式会社
世田谷区介護サービスネットワーク
世田谷区福祉移動支援センター そとでる
NPO 法人 せたがや移動ケア「おでかけサポーターズ」
社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター

(掲載順)



KAiGO®
PRiDE

介護の真実の姿を
クリエイティブの力で
目に見える形にすることで
日本の介護の認識を変えていく。

KAiGO × Creative



マンジョット・ベディ
（一社）KAiGO PRiDE 代表理事
クリエイティブディレクター
カメラマン

「私もあなたも、最期まで自分らしく生きるために。」
世界的クリエイター”マンジョット・ベディ”が日本の介護をリデザイン。世界で最も
高齢化が進む日本における介護の課題に対し、介護職の self-respect（自己尊敬）を形に
することで、社会からのリスペクトに繋がります。誰もが自分らしく安心して最期まで生き
られる社会のために、現役介護職の声を届けるプラットフォームとして都道府県を
跨いで日本全国で活動を行っています。



介護の認識を変える 1 週間

KAiGO PRiDE WEEK

都道府県を跨ぎ、国を跨ぎ、介護の認識を変えるイベント「KAiGO PRiDE WEEK」を来年 2 月も実施！
世田谷でも実施した今年のイベントの様子は下記 QR コードからご覧頂けます。



マンジョット・ベディについて
(Wikipedia)



KAiGO PRiDE 公式 SNS



KAiGO PRiDE WEEK
アーカイブ映像

一般社団法人 KAiGO PRiDE は「せたがや福社区民学会」の団体会員です

安心・安全・笑顔の日々をつくる



「フードサービス事業」



「車両運行サービス事業」

シダックスグループは
3つのサービスを中心に、
暮らしを支えるサービスを
提供しています。



「社会サービス事業」

SHIDAX

未来の子供たちのために

シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-12-10 シダックス・カルチャービレッジ 電話：03-6731-9111 (代表)
<https://www.shidax.co.jp>

安心と安全のコンサルタント 保険のことなら何でもご相談ください

(財)東京都人材支援事業団指定代理店

特別区職員互助組合指定代理店

- ◆火災保険
 - ◆自動車保険
- ◆旅行保険
 - ◆自治会保険
- ◆イベント保険
 - ◆その他各種損害保険

三井住友海上火災保険(株)代理店
日本損害保険協会認定 特級(一般)資格

あらかわ総合保険

〒157-0067 東京都世田谷区喜多見 6-6-18

TEL:03-3415-8513 FAX:03-3415-8516

E-mail:kazusige@msh.biglobe.ne.jp

世田谷区の地方会社として、

地域社会の発展と区民福祉の向上に寄与する経営を基本とします。

だれもが輝く働き方で、地域社会とともに歩み、持続可能な共生社会の実現に貢献する企業を目指します。

私たちは、つながる 広がる 心づかいで、区民の笑顔を増やします。

玉川区民会館1F
せせらぎホール併設

Café STREAM

カフェ ストリーム

香り高いトラジャ・コーヒー、
区内唯一の
ディッピングドッツ・アイスクリームは
いかがですか？



03-3702-4536

障害者雇用を
積極的に進めています



区民センターなど公共施設で、知的・
精神・身体障害のある従業員 87 名が、
清掃、受付案内、事務補助として
働いています。

エフエム世田谷



83.4MHz

災害時にも、皆様に必要な
情報を提供します。

— FM放送エリア —
世田谷区 他

<インターネットラジオ>



FM 世田谷
ホームページ



Listen Radio

ひとと 街と 明日の まん中に



株式会社 **世田谷サービス公社**
SETAGAYA GENERAL SERVICES CO.,LTD.



有料老人ホーム・サ高住のことなら

老人ホーム紹介センター
ロイヤル介護 入居相談室

**業界トップクラス
の実績**

業歴**13**年以上の経験
相談実績**100,000**組以上

ご相談無料

インターネットに載っていない情報も、
対面で丁寧にお伝えしています。
老人ホーム探しをスムーズに解決したい方! 私達にお手伝いさせてください。

情報力に自信があります。

実際に現地に何度も足を運んで集めた情報をお伝えしています。
現場の声・実際に入居されている方の声を大事にしています。

丁寧な対応を心がけています。

お客様のお話をしっかりお聞きしてから、ご要望に合わせてご提案します。担当者が見学の段取りや入居後のアフターフォローも行いますのでご安心ください。

スピーディーな対応をいたします。

年中無休(年末年始を除く)で、夜20時まで毎日営業しています。
独自の情報システムや各種のネットワークを使い、
急なご相談にもスムーズにお応えします。

安心ポイント 60名以上の資格者・経験者がご対応いたします!

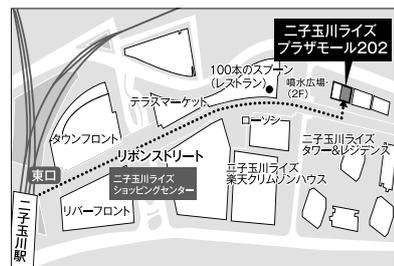


世田谷二子玉川ライズ店 二子玉川駅東口徒歩5分

☎ **0120-03-6186**

〒158-0094 東京都世田谷区玉川1-15-6
二子玉川ライズプラザモール202号

営業時間/9:00~20:00 TEL.03-3709-2111 (代)
年中無休(年末年始を除く) FAX.03-3709-2112



新宿本店

新宿駅西口徒歩2分

☎ **0120-87-6186**

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-10-1
O-GUARD新宿10階

営業時間/9:00~20:00 TEL.03-3371-2111 (代)
年中無休(年末年始を除く) FAX.03-3371-2110



〈運営〉 東京ロイヤル株式会社 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-10-1 O-GUARD新宿10階
〈仲介〉 東京都知事免許(3)第93579号(公社)全日本不動産協会会員(公社)首都圏不動産公正取引協議会加盟(公社)不動産保証協会会員



医療法人社団 創福会 Fukuro Clinic JIYUGAOKA

ふくろうクリニック自由が丘

TEL : 03-3701-3351

訪問診療も対応しております。



〒158-0083 東京都世田谷区奥沢6-20-23
フォーラム自由が丘1F-A・2F-A

脳神経外科

- 脳振盪 ●スポーツ頭部外傷
- 頭痛 ●高次脳機能障害 ●脊椎脊髄

脳神経内科 呼吸器内科 疼痛緩和内科 老年内科

- もの忘れ ●パーキンソン症候群
- がん緩和ケア ●更年期・運動処方
- 家庭医療 ●ロコモフレイル
- 健康診断・予防接種

整形外科

- 腰痛 ●膝痛
- 肩こり ●スポーツ整形外科

リハビリテーション

MRIセンター

精神科

世田谷区の印刷は「みやざき印刷」へ

主要品目 / 名刺・ハガキ・封筒・伝票・冊子・チラシ・ポスター・パンフレット・カタログ

創造する喜び 有限会社 みやざき印刷

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-33-2
TEL (03) 5384-1331・FAX (03) 3305-2528
E-mail : info@miyazaki-p.co.jp
URL: <http://www.miyazaki-p.co.jp/>

[みやざき印刷](#) [検索](#)



住み慣れた地域で、生涯いきいきと
安心して暮らしていただくために

東京リハビリテーションセンター世田谷

世田谷区60年特別地域福祉推進プランに、重点的に推進策グループが制定・実施する、ワンストップ型「生活・医療・入学」を連携した医療・介護・福祉の一体的な総合施設です。すべては患者さん・利用者さんのために施設を「生活」とする世田谷北が丘は、地域の福祉と安心、"住み慣れた地域で、生涯いきいきと、安心して暮らしていただくために"の理念を掲げ、積極的に取り組んでいます。



社会福祉法人 南東北福祉事業団 / 一般財団法人 脳神経疾患研究所

東京リハビリテーション センター世田谷

〒156-0043 東京都世田谷区松原六丁目 37 番 1 号
TEL : 03-6379-0427(代表) FAX : 03-6379-0428
Mail : setagaya.info@mt.strins.or.jp



【公式サイト】

<http://www.tokyo-rehabili.jp/>



東京リハ 世田谷

検索

- *小田急小田原線 「梅ヶ丘駅」北口 徒歩5分
- *京王井の頭線 「東松原駅」下車 徒歩14分
- *東急世田谷線 「山下駅」下車 徒歩9分
- *小田急バス (渋54) 渋谷駅～梅ヶ丘駅～経堂駅
光明学校・松原下車 徒歩1分

「安全」「安心」「快適」を乗せて75年。

エレベーターの一生に、
責任を持ちます。

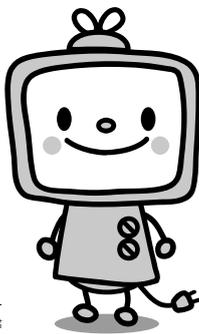
FF Fuji Elevator

富士エレベーター工業株式会社

fuji-elevator.co.jp



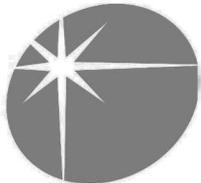
〒101-0047 東京都千代田区内神田3-4-6 TEL:03-3252-8961



弊社キャラクター
メディア君

メディアチャンネルは、
**「見るホームページ」から
「使えるホームページ」へ!**
を、プロデュースするホームページ制作会社です。

 株式会社メディアチャンネル ◆ <https://www.media-ch.com/> ◆ 03-5738-7662



kisei·kai

在宅総合ケアセンター成城

成城リハケア病院

外来 ● 祝日も診療しています ● 休診日/日曜日・年末年始 **入院**

診療科目 内科・リハビリテーション科・整形外科 病床数 30床(個室3室・3人床1室・4人床5室・2人床2室)

受付時間 8:30~17:00 診療時間 8:50~17:15 電話 03-5429-2292



かがやく“笑顔”のために
森永乳業

世田谷区介護サービスネットワーク

世田谷区介護サービスネットワークは、世田谷区内で介護保険サービスを提供する事業者の団体です。

介護サービスの
質向上

地域包括ケア
の推進



独自の研修・
勉強会を開催

加盟事業所数
350 以上

安心して暮らし続けることができる地域づくりを目指しています。

事務局:世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒156-0043 世田谷区松原 6-37-10-1F

TEL : 03-6379-4280
FAX : 03-6379-4281

そとでる

世田谷区福祉移動支援センター

誰もが自由に外出
できる世田谷に
するために

お一人では外出が困難な方を対象に、車いす、ストレッチャーで乗車できる介護タクシーや移送 NPO の配車・相談をいたします。加盟事業者 127、登録車両 250 台程の「そとでる」をご利用ください。



※原則として世田谷区民が対象ですが、移動に関するご相談は、区外のかたでもお受けいたします。

<受付時間>

祝日を除く月～金 9:00～17:00

TEL : 03-5316-6621

FAX : 03-3329-8311

<http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/>

「そとでる」は、世田谷区から補助金交付を受け NPO 法人せたがや移動ケアが運営しています。

ボランティアグループ

おでかけサポーターズ おでかけ支援ボランティア募集



誰もが自由に「おでかけ」できる世田谷を創るために一緒に活動しませんか

- ・おでかけイベントの企画と実施
 - ・おでかけの運転や付き添い
- ・区内の交通不便地域を考える
 - ・おでかけに関する調査や提言
- ・活動を通じての仲間づくり
 - ・おでかけサポートの担い手育成

<事務局は「そとでる」です。気軽にお電話ください。>

TEL : 03-5316-6621

人をつなぎ 地域をつなぎ 共に笑顔のパートナー



社会福祉法人
世田谷区社会福祉事業団



ショート
ステイ

デイ
ホーム

特養
ホーム

ホーム
ヘルプ

訪問
看護

居宅介護
支援

あんしん
すこやかセター

私たち、事業団が展開する



マスコットキャラクター「シャジン」

7つのサービス

世田谷区内全 29 事業所の総合力

【法人本部】

〒154-0017 東京都世田谷区世田谷1-23-2
Tel. 03-5450-8223

世田谷区社会福祉事業団

検索



事業団の
ホームページ



事業団の
採用サイト



事業団の
公式X



事業団の
公式Instagram



世田谷で
学ぶ

研修センターの取組み

- ◆福祉の理解
- ◆人材発掘・就職支援
- ◆事業者支援・活動支援
- ◆調査・研究



世田谷で
活かす

世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒156-0043 世田谷区松原 6-37-10 世田谷区立保健医療福祉総合プラザ1階
TEL : 03-6379-4280 FAX : 03-6379-4281



ホームページ

<https://www.setagaya-jinzai.jp>



フォローしてね。

X (旧Twitter)

@SetagayaKenshuC



世田谷区福祉人材育成・
研修センターエックス
03-6379-4281
世田谷区松原6-37-10

資料

- 「せたがや福社区民学会」規約
- せたがや福社区民学会設立趣旨

「せたがや福社區民学会」規約

平成21年12月12日
改正 平成26年 3月10日
改正 令和元年12月 7日

第1 総則

1 名称

本会は、せたがや福社區民学会（以下「学会」という。）という。

2 事務局

学会の事務局は、社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団世田谷区福祉人材育成・研修センター（以下「研修センター」という。）に置く。

第2 目的及び事業

3 目的

学会は、世田谷区民（以下「区民」という。）の福祉の向上をめざして、世田谷区内（以下「区内」という。）において福祉の事業所で働く人、福祉について学ぶ人、教育・研究する人、行政に携わる人及び区民が、互いに対等な立場で福祉実践活動の工夫や抱える課題について、研究成果を発表し、相互に学びあうために、世田谷区を区域として設置する。

- ① 区内の優れた福祉事業や実践活動について発表する機会をつくり、福祉に携わる人の仕事への意欲を増進させ、専門性の向上を目指す。
- ② 区民が学会への参加活動を通じて、福祉活動への関心を高め、地域福祉に対して理解を深める。
- ③ 会員が自由に議論し、共に学び、交流を深める。
- ④ 実践事例を発表することにより、時代に即した新しい試みを推進する。

4 事業

学会は、次の事業を行う。

- ① 大会の開催
- ② 報告集、学会通信などの発行
- ③ 会員同士の情報交換と交流
- ④ 区民および全国に向けた学会の周知
- ⑤ その他、学会の目的を達成するために必要な事業

第3 会員

5 会員の要件

学会の会員は、世田谷区に在住、在勤、在学者で次のいずれかに該当する者（個人または団体）とする。

- ① 福祉サービスを提供している者、福祉サービスを利用している者
- ② 福祉に関するボランティア活動や地域福祉活動を行っている者
- ③ 高齢者、障害者または子どもの福祉に関わる者
- ④ 福祉について学び、研究する者
- ⑤ 福祉活動について関心のある者
- ⑥ 福祉行政に携わる者

6 会員の権利

学会の会員は次の権利を持つ。

- (1) 総会における議決権を行使する。
- (2) 大会において研究発表を行う。
- (3) 学会通信への投稿及び配付を受ける。
- (4) 会員の交流

7 賛助会員の要件及び権利

賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の目的に賛同する者（個人または団体）とし、6の会員の権利のうち、総会における議決権は持たない。

8 入会

学会に入会しようとする者は、所定の申込書を事務局に提出し、登録する。

9 会費

- (1) 会員、賛助会員は、別に定めるところにより会費を納めなければならない。
- (2) 既納の会費は返納しない。

10 退会等

- (1) 会員、賛助会員は、事務局に所定の退会届を提出し、退会することができる。
- (2) 会費を納期から1年以上滞納した場合は、退会したとみなすことができる。
- (3) 学会の名誉を傷つけ、または本会の目的に反する行為をし、あるいはこの規約に反する行為があったときは、理事会の議決を経て除名することができる。

第4 組織

11 役員

学会に理事及び監事を置く。

- (1) 理事 20名程度
- (2) 監事 2名

12 役員を選任

理事及び監事は、会員の互選により選任する。

- (1) 理事のうち1名は理事の互選により会長となる。
- (2) 会長は必要と認めるときは、理事の中から副会長を指名する。

13 役員任期

- (1) 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
- (2) 役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行うものとする。
- (3) 補欠により就任した役員任期は、前任者の残任期間とする。

14 会長の職務

会長は、学会を代表し、会務を統括する。

15 会長の職務代行

会長に事故あるときは、会長があらかじめ指名する他の理事が、その職務を代行する。

16 理事会

- (1) 学会の運営に関する審議は、理事をもって組織する理事会において行う。
- (2) 理事会は、会長の招集により随時開催する。
- (3) 理事会に議長を置き、議長は会長がつとめる。
- (4) 理事会は、理事総数の過半数の出席がなければ開会することができない。

17 理事会の審議

- (1) 理事会の議事は、出席者の過半数で決し、審議事項は次のとおりとする。
 - ① 予算、決算、事業計画及び事業報告
 - ② 学会の規約の制定及び改廃
 - ③ その他、会務運営のために必要な一切の事項
- (2) 会議の議事については、議事録を作成するものとする。

18 監事

監事は、学会の会計及び会務執行状況を監査する。

19 運営委員

- (1) 理事の互選により運営委員を置き、適宜、運営委員会を開催する。
- (2) 運営委員は、学会の運営に関わる実務を行う。

20 総会

- (1) 会長は、毎年1回会員の総会を招集する。
- (2) 会長は、必要と認めるとき又は会員総数の3分1以上から総会招集を求められた場合には、臨時総会を開くことができる。

21 総会の議決

総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。議決事項は次のとおりとする。

- ① 17の①及び②に掲げる事項
- ② その他理事会が必要と認めた事項

第5 会計

22 経費

学会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもって充てる。

23 予算

学会の予算は、理事会の審議を経て、総会において議決する。

24 決算

決算は、監事の監査の後、理事会の審議を経て、総会において議決する。

25 会計年度

会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6 解散

26 解散

学会は、会員総数の3分の1又は理事総数の過半数から発議された場合には、総会において出席会員の3分の2以上の承認により解散する。

附 則

(施行期日)

- 1 この規約は平成21年12月12日から施行する。

ただし、第5の22から24までの規定については、平成22年4月1日から施行する。

(学会設立時の措置)

- 2 設立総会の議事は設立発起人会が提起し、総会出席者の半数以上の賛同により、学会は設立する。

- 3 設立発起人会の事務局は、研修センターに置く。

- 4 学会設立前に、設立発起人会の事務局に入会の申込書を提出してある場合は、設立の日からこの学会の会員となるものとする。

- 5 この学会の設立当初の役員は、設立総会で選任する。この役員任期は、第11条の定めに関わらず、平成23年3月31日までとする。

- 6 平成21年度の会計については、世田谷区から研修センターに交付される委託料により研修センターで行い、理事会及び世田谷区に報告する。

附 則 (令和元年12月7日)

(施行期日)

- 1 この規約は令和元年12月7日から施行する。



せたがや福祉区民学会設立趣旨

福祉活動は何よりも実践を基本とし、その質を高め、内容が広く地域の方々に共有されることが望まれ、地域の中で行われている取り組みについて互いに発表し、共有することによって、さらに高まります。また、自分たちの取り組みが、地域全体の中でどのように位置づけられるのか、再発見することも大切です。

せたがや福祉区民学会は、世田谷区内の大学、福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に、福祉活動や研究成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成21年12月に設立されました。

本学会は身近な地域で日頃の実践を発表し、情報交換を通してお互いの交流を深めあい、区民福祉を向上することを目的としています。



せたがや福社區民学会第15回大会
報告集

発行：せたがや福社區民学会第15回大会実行委員会
発行日：令和6年3月
編集協力：東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科学生
（表紙、裏表紙）
開催校：東京農業大学

〈事務局〉

社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団

世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒156-0043

世田谷区松原6-37-10

世田谷区立保健医療福祉総合プラザ1階

TEL：6379-4280 FAX：6379-4281

E-mail：fukushi-jinzai@setagaya-jinzai.jp

URL：https://www.setagaya-jinzai.jp/society

主催 せたがや福祉区民学会
協力 東京農業大学
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援 世田谷区
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会

